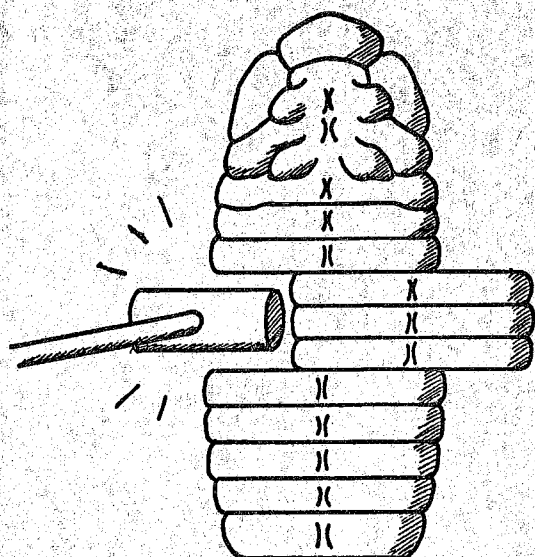


INFORMATION *Circular*

JAPANESE SOCIETY OF DEVELOPMENTAL BIOLOGISTS

■第43回運営委員会報告	事務局	1
■第23回総会報告	事務局	2
■大会講演要旨のDGDへの掲載停止について	安増郁夫	4
■第23回大会決算報告	大会委員会	6
■第23回大会後記	天野 實	7
■大会準備委員からの提言	嶋田 拓	8
■第23回大会の感想		
広島大会雑感	西駕秀俊	8
10年ぶりの広島	阿形清和	9
大会の感想	佐々木洋	11
大会をふりかえって	大隅典子	12
■来年度の大会開催に関してのお願い	安増郁夫	14
■事務局より		14
■公募のお知らせ		15
■講演会のお知らせ		25
■日本学会議だより		26
■会員異動		28
■広告掲載・賛助会員入会のお願い		35



NO. 66

AUGUST 1990

日本発生生物学会

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学 理学部 動物学教室

会 長：〒 169 東京都新宿区西早稲田 1-6-1
 早稲田大学教育学部生物学教室
 安増郁夫（電話 03-203-4141 内線 3911）
 DGD編集主幹：〒 090 札幌市北区北10条西8丁目
 北海道大学理学部動物学教室
 片桐千明（電話 011-716-2111 内線 5298）
 DGD編集幹事：〒 730 広島市中区東千田町 1-1-89
 広島大学理学部動物学教室
 嶋田 拓（電話 082-241-1221 内線 2448）
 事務局：〒 113 東京都文京区本郷 7-3-1
 東京大学理学部動物学教室
 （幹事長） 塩川光一郎（電話 03-812-2111 内線 4431）
 （庶務幹事） 深町 博史（電話 03-812-2111 内線 4434）
 （会計幹事） 田代 康介（電話 03-812-2111 内線 4433）
 学会センター：〒 113 東京都文京区弥生 2-4-16 学会センタービル内
 財団法人 日本学会事務センター
 日本発生生物学会担当係（電話 03-817-5801）
 （FAX 03-817-5800）

日本発生生物学会への入退会，住所・所属変更，会費納入，および出版物（DGD，イン
 フォメーション・サーキュラーなど）の郵送については，上記の日本学会事務センターに書
 面でお問い合わせ下さい。

第43回 運営委員会報告

第43回運営委員会は1990年5月23日午後5時から広島大学総合科学部会議室にて開催された。出席者は以下の通りであった（敬称略）。

安増郁夫（会長）、江口吾朗、岡田節人、近藤寿人、佐藤矩行、嶋田 拓（兼編集幹事）、鈴木義昭、竹市雅俊、東中川徹、星 元紀、山上健次郎、山名清隆、米田満樹（以上運営委員）、片桐千明（編集主幹）、天野 實（大会準備委員長）、吉里勝利（会計監査委員）、塩川光一郎（幹事長）、深町博史（庶務幹事）、田代康介（会計幹事）

1. 会長挨拶

2. 庶務報告

- ・会員数 853 名（1990年4月1日現在）
- ・サーキュラー65号発行（1990年3月）
- ・東レ研究助成（2件）、Brain Science 研究助成（2件）は選外であった。
- ・山田研究助成へは2件を推薦した。現在財団で審査中である。
- ・成茂基金による海外出張援助については3件の応募があり、現在審査中である。
- ・学術会議との共催で、シンポジウム「発生物学の現状と将来」を2月3日に東京大学 山上会館で開催した。180名の参加者があり、盛会であった。
- ・学会会員を増やし、学会財政を少しでもよくするために、サーキュラーに「学会入会申込書」「DGD基金申込書」「広告掲載申込書」「賛助会員入会申込書」を綴じ込むことにした。ご利用頂きたい。
- ・会計幹事の武田洋幸氏の転出に伴い、田代康介氏が会計幹事を務めることになった。

3. 会計報告

- ・DGD売上に関する契約を現在更新中であるが、円安に伴い、海外でのDGD売上が予算より約27万円増加すると思われる。
- ・DGD掲載広告が1件、サーキュラー掲載広告が3件、賛助会員が1件、各々減っており、結果として広告収入が予算より約23万円減と思われる。
- ・DGD基金による収入は4月末までに76万円と、予定額の $\frac{1}{2}$ に達した。しかし学会の財政は依然として苦しく、今後とも会員の皆様のご援助をお願いしたい。

4. 会計監査報告

- ・吉里勝利会計監査委員より、会計は適正であった旨報告された。

5. 編集委員会報告

- ・論文を受理してから印刷までの期間が長引いており、この期間を最長6カ月に短縮すべく努力している。
- ・投稿論文数が減りつつある。会員の皆様からの積極的な投稿をお願いしたい。

- ・一年間に出版できる論文数を増やし印刷費を減らすためにも、大会の講演要旨をDGDに掲載する慣例を廃止したい（サーキュラー65号の「DGD編集部より」を参照されたい）。
- 6. 学術会議報告
 - ・サーキュラー本号の「日本学術会議だより」を参照されたい。
- 7. 選挙管理委員会報告
 - ・サーキュラー65号に報告したように、上智大学の山上健次郎、井内一郎、吉田昭広の三氏が選挙管理委員を務めることとなった。
 - ・8月末に投票用紙郵送、10月に開票の予定で選挙を行うつもりである。
- 8. 次期大会開催地について
 - ・早稲田大学教育学部の安増郁夫会員より、1991年6月11～13日もしくは18～20日に早稲田大学・学術情報センターで開催する予定であると報告された。
- 9. 大会委員長よりの挨拶
- 10. その他
 - ・編集委員会より提案のあった「大会の講演要旨をDGDに掲載する慣例を廃止すること」が審議され、24日の総会に提案することが了承された。（本サーキュラーの安増会長の文章を参照されたい。）
 - ・松田会員より提案のあった「大会参加要項と申込要旨を和英両言語で書くようにすること」（サーキュラー65号参照）が審議され、英語で大会申込ができるように記入要項を改めることが了承された。
 - ・「日本複写権センター」より申し入れのあった「複写権の委託に関する件」が審議され、学会としても著作権の確立に向け努力することになった。

第23回 総 会 報 告

第23回総会は1990年5月24日午後4時30分より広島県立産業情報交流センターにおいて開催された。議長に嶋田 拓氏（広島大・理・動物）を選出した後、以下の次第で議事がすすめられ、全て了承された。

1. 天野 實大会委員長挨拶
2. 安増郁夫会長挨拶
3. 1989年度活動報告
 - a) 事務局より：深町博史庶務幹事
 - ・会員数は853名である（1990年4月1日現在）。
 - ・サーキュラー63～65号を発行した。

- ・運営委員会を2度開催した。

第42回：1月11日（東京），第43回：5月24日（広島）

サーキュラー65号及び本号参照

- ・学会会議との共催で，シンポジウム「発生物学の現状と将来」を2月3日に東京大学山上会館で開催した。
- ・大会参加要項と申込要旨を和英両言語で書くことにした。
- ・会計幹事が武田洋幸氏から田代康介氏に交代した。

b) 編集委員会より：片桐千明編集主幹

・サーキュラー65号及び本号参照

4. 1989年度決算報告：田代康介会計幹事

・サーキュラー65号参照

5. 会計監査報告：吉里勝利会計監査委員

・監査の結果，会計は適正であった旨報告された。

6. 学会会議報告：平本幸男学会議員

・サーキュラー64号～本号の「日本学会会議だより」参照。

7. 1990年度活動について：安増郁夫会長

・「大会の講演要旨をDGDに掲載する慣例を廃止すること」が提案され，議論され，最終的には拍手をもって了承された。（注）

8. 1990年度予算案：田代康介会計幹事

・サーキュラー65号参照。

9. 安増郁夫第24回大会準備委員会委員長挨拶

（注）この件に関しては，会長より以下のような経過説明がありました。即ち，①DGDが大型化された米田前編集主幹の時代から，この問題は何度か議論されてきたこと，その理由は片桐現編集主幹がサーキュラー65号に書いておられるように（「DGD編集部より」参照），(a)レフリーの審査無しに発表される英文要旨と，レフリーの審査を受けた他の論文とがDGD内に混在するため雑誌の統一性が損われること，(b)大会の英文要旨の著者名などがDGDのリファレンスに含まれない点でも，雑誌内容の統一性が損なわれること，(c)国際誌に論文を投稿することが一般的になった現在では，短いながら英文で発表すること自体が持つ意義が薄れていること，などにあります；②これまでこの提案が編集委員会から何度か運営委員会に提出され，運営委員会で長らく議論されてきたこと；③最近，状況の変化があり，この提案が第43回運営委員会で可決されたこと，その状況の変化とは即ち，(a)DGDへの投稿論文数が増加し，論文受理から印刷までの期間が延びつつあり，この対策を考えなければならないこと，（大会の講演要旨のDGDへの掲載を止めれば，論文7編分を掲載する余裕ができる）(b)一方，学会の財政は極めて苦しく（1990年度の予算で200万円の赤字を見込んでいる），DGD印刷費を増やす余裕は全く無いこと，(c)むしろ，DGDへの大会の講演要旨の掲載を止めれば印刷費が年間約100万円分軽減でき，学会財政がかなり楽になること，の3点であります。

これに対して会員の一部から，英文要旨を supplement として独立させ，DGDに載せるという提案もありました。しかし印刷費に年間約100万円かかることを考えると，財政的に困難であると運営委員会で判断致しました。

なお，この結果第24回大会からは大会前に会員に配布される「大会発表要旨集」が唯一の大会の講演記録となります。また運営委員会及び総会で「大会参加要項と申込要旨を和英両言語で書くようにすること」が了承されましたので，大会申込の書式等が若干変わることになります。この点，ご注意の下さるようお願い致します。（本サーキュラーの安増会長の文章を参照されたい。）

大会講演要旨(英文アブストラクト)のDGDへの掲載停止について

会 長 安 増 郁 夫

本学会の刊行している Development, Growth and Differentiation (DGD) には大会でおこなわれた講演の英文要旨が掲載されております。この英文講演要旨のDGDへの掲載を、今回の大会以降停止することが今回の運営委員会で決定され、総会で承認されました。これまで、英文講演要旨のDGDへの掲載の可否については、アカデミックプレスとの海外頒布に関する契約が議題になった時期、そして、DGDをA4版に改めることが議論されていた時期の通算4年間に開かれた数回の運営委員会で議題になっておりました。しかし、英文講演要旨掲載が必ずしもアカデミックプレスとの契約で支障とはならなかったこと、DGDがA4版に変更された場合の要旨の印刷技術上の問題が当時のDGD編集主幹米田先生及び編集幹事加藤先生の御努力で解決したことが幸いして、英文講演要旨のDGD掲載の可否については運営委員会の合意を得るまでの議論はおこなわれず、現在に至りました。

今回の運営委員会を含めて、これまでの委員会では、DGDの英文講演要旨掲載を廃止すべきであるという意見は、以下のような原則論に基づいております。即ち、DGDは、日本発生物学会によって選任された編集主幹が主催する編集委員会の責任のもとに出版されている国際誌であり、会員以外の投稿を受け入れている開かれた国際誌である。したがって、英文講演要旨は短報であるとはいえ、レビューも受けず、編集委員会の関知しない報文であり、このような報文はDGDに掲載すべきものではないという考えです。一方、これに対して、DGDは本学会の機関誌である以上、会員の権利である大会での講演がおこなわれた場合、その要旨がDGDに掲載されるのは好ましいことであるという考え、DGDに掲載された要旨は、プライオリティを主張することを可能にする、そして、会員の研究をエンカレッジするものでもあるという見解が述べられました。さらに、大会講演要旨をDGDに掲載することは、本学会の活性を広く国際的に知らせるという重要な役割をもち、更に、それはDGDに掲載されている論文の内容と、大会要旨に含まれる研究内容の乖離を埋めるものであるという見解も述べられました。

これらの議論は、本学会の機関誌であるDGDの性格を決定する重要な問題を含んでおり、この問題について十分な討議がなされるべきではありましたが、残念ながら、実務上の問題が起こるたびに、このことに関する討議は数回にわたって継続的に繰り返されたにすぎませんでした。今回は、編集主幹片桐先生が既に前号のサーキュラーでお示しくださった問題から、このことが編集委員会から提案され、運営委員会の議題となりました。

この議題が今回、編集委員会、運営委員会に提出されました直接の理由は、論文刊行の遅れを取り戻して、投稿者のDGDへの“信頼”を得ること及び論文の著者に対するDGDの義務を果たすことを可能にするためでありました。

これまで日本発生物学会は、DGD投稿者の経済的負担を軽減するため、著者に無料で別刷100部を提供し、超過頁印刷代金を普通の長さの論文であるなら無料になるよう、制限頁の大幅

な増大をおこないました。そして、DGDのサーキュレーションを改善するため、海外頒布に関してアカデミックプレスと契約し、A4版への変更を試みました。これらのことは、優れた論文原稿を多く投稿して頂き、さらなるDGDの発展を期待しておこなわれました。又、編集委員会の御努力で掲載されているミニレビューも、DGDの魅力を増していると考えられます。これらの処置以外に、論文の刊行に必要な時間の短縮も重要であり、その短縮は投稿者にとって魅力になるものであると考えられます。この論文刊行の遅れは、当然多くの人々のDGDへの投稿意欲を削ぐものであり、投稿論文の著者の信頼を裏切るものでありましょ。DGDは速報誌ではないとしても、これまで出来るだけ速く刊行されること、少なくとも6カ月以内に刊行されることを目標としておりましたが、現在、DGDに投稿された論文が受理後、刊行されるまでに6カ月をかなり超えてしまう状態です。この遅れを解消するために、要旨印刷停止以外にもさまざまな方策が議論されました。

この遅れを解消するためには、DGDの増頁をおこなうのが最もよい方策であり、本年は多少の増頁をおこなって論文刊行までの時間を短縮することになると考えますが、抜本的な解決が可能な程の増頁は、現在の学会財政から考えて、とても不可能です。一方、大会講演要旨のDGD掲載を停止いたしますと、7編の論文の追加刊行が可能となり、現在の投稿状況から考えると、投稿された論文は、最も遅い場合でも受理から6カ月以内に出版されることになります。運営委員会での熱心な討議の結果、DGDに掲載される論文は、本来レビューされ、編集委員会の決定によるものでなければならないという原則に従い、さらに上記の実務上の問題を解決するため、大会講演要旨のDGDへの掲載を停止することになりました。

講演要旨のDGDへの掲載の停止は、今後新たな問題を産みだすであろうことは予測できません。このことを解消するため、大会講演要旨をDGDのサブリメントとして刊行することも提案されました。このことは、最もよい解決方策であるとは考えられますが、残念なことに現在の学会財政では、とても出来ることではありません。従って、大会講演要旨は、現在の状況では刊行できないことになります。

発生物学会はDGDの発展のため、出来得る限りの方策をこうじてきており、このため投稿者の負担は軽減されていると考えます。そして、今回出来得る限り刊行までの期間の短縮をおこなうことが可能になりました。DGDがまだサーキュレーションを含めて“発展途上”の国際誌であるという評価をお持ちの会員もいらっしゃると思いますが、このことを除けば、DGDへの投稿への障害はほとんどなくなっていると考えます。多くの会員の皆様からの優れた論文のDGDへの投稿があれば、DGDは全ての人々から“先進的”国際誌であるという評価を得ることが可能になり、同時に多くの会員による優れた論文のDGDへの投稿は発生物学会大会の講演内容と、DGDに掲載される論文内容の乖離を解消することになると確信いたします。DGDのさらなる発展の基礎を整備する努力は今後も勿論続けなければならないと考えます。しかし、DGDの発展を真に支えるものは、当然それに掲載される論文そのものです。会員の皆様に、優れた論文のDGDへの投稿を心からお願い致します。

日本発生物学会第23回大会決算報告

1. 収入の部

大会参加費	1,683,000円
内訳 一般 (5,000 × 243 = 1,215,000)	
学生 (4,000 × 117 = 468,000)	
学会本部からの補助金	250,000
編集・運営委員会経費 (学会本部から)	19,000
広告・寄付等	201,000
利息	3,869
収入合計	2,156,869円

2. 支出の部

会場費	277,010円
会場設営費	190,127
印刷費 (講演要旨集の一部と胸札を含む)	317,558
アルバイト経費	524,500
シンポジウム経費 (講師謝金を含む)	193,642
弁当経費	53,710
懇親会補助	82,000
文具・通信費	135,583
準備委員会経費	20,640
編集・運営委員会経費	47,017
謝金	14,880
支出合計	1,856,667円

3. 残金 (残金は全額をDGD基金として学会本部に寄付) 300,202円

懇親会経費

懇親会参加費 (4,000 × 200 = 800,000)	800,000円
懇親会補助	82,000

合計	882,000円
----	----------

第23回 大会 後 記

大会委員長 天 野 實

第23回の日本発生生物学会大会が広島で5月24日から3日間開催されました。札幌での大会が10年の間隔をおいて開かれたように、広島大学歯学部で菅野義信先生が大会委員長として開催されてから、今年が丁度10年目に当たります。今年の大会は5月に行われましたが、幸い天候にもめぐまれ快適な3日間でありました。

さて、今回の大会開催の運びをかえりみますと、数年前から広島で大会開催をしてほしいとのお話はありましたが、色々な事情から準備委員として可能な人数が少なくかつ私自身多忙を極めておりまして思案をしておりましたところ、丁度発生生物学会の会員である嶋田 拓、吉里勝利先生をはじめ若い研究者の方々が広島に来られたこともあり、開催可能との自信をもちお引受けした次第です。大会発表要旨集の末尾に記しました総合科学部、理学部、生物生産学部、歯学部、原爆放射能医学研究所という4学部1研究所の教官、院生会員の方々が準備委員として大会の運営に参加しました。とくに若い院生会員の活躍に負うところが大きく、学部をこえての友情の輪が広がったことを大変嬉しく思っております。これらの方々の一致協力があったはじめて大会が可能であったことを報告いたします。

大会参加申込を3月24日に締め切りましたところ、参加希望者が202名でそのうち口頭発表希望者が多くありました。しかし、時間の関係上、多数の方々にポスター発表に廻っていただきました。結果としては口頭発表114題、ポスター発表57題となりました。参加者申込を締め切った時点では大会運営の財政面で心配もしましたが、当日参加者が158名もありほっと安堵した次第です。今後の大会運営を考えますと事前に参加申込をされるよう会員にお願いいたします。

今年のシンポジウムは「神経系の初期発生からネットワーク形成」という題で、話題提供者が本学会ではふだんお話を聞く機会の少ない方々なので、非常に有意義であったと思います。一方ポスター発表の会場の方もゆとりがあって、かつ長期間展示したことも好評でした。ポスター発表をゆっくりと読んだという方の話や、大会期間中に会員同志が個人的に色々話し合えたということも聞いております。改めてポスター発表の長所を感じた次第です。10年前の発表件数は総数で119件でしたが、今年は口頭、ポスター発表を合わせると171件もありましたから、20分の発表を15分にせざるを得なかったわけでありました。件数を少なくして20分発表でポスターを増やすのがよいかどうかは今後の検討課題であろうと思います。

今回の大会に御高齢の団 勝磨先生が出席され、お元気な顔をみせられたことは大変嬉しいことでありました。会場からは市内を流れる太田川が目の前にあり、典型的な汽水域での干潮、満潮の差の大きいことをまのあたりに見られたことは水生動物を実験材料として扱っておられる研究者にはよい経験であったようです。

本大会が多数の参加者を得、楽しい実りのあるものになったことの御礼を申し述べて大会後記といたします。参加者の皆様ありがとうございました。

第23回 大会準備委員としての体験からの提言

嶋 田 拓 (広大・理・動物)

第23回大会の準備委員として気がついたことを述べさせていただきます。

それは、当日参加者が非常に多く（全参加者 360 名の内 158 名）、準備のための予算が組みにくかったことです。当初はかなりの赤字を覚悟しました。参加することがわかっている会員がなるべく締切までに参加申し込みをされると大会の運営が楽になると思います。広告や寄付をたくさん貰えれば問題無いが、開催地によっては寄付が十分に期待できないところがあるし、寄付に依存するのも気持ちがよくないと思います。

懇親会についても同様で、全参加者 200 名余の内 80 名位が当日申し込みでした。予め申し込んでおいて貰えると十分な準備が出来るのにと残念でした。なるべく多くの方に参加して貰って会を賑やかにしたいのでぎりぎりまで参加を受け付けていますが、懇親会の係はかなり大変でした。

参加者にもそれぞれ都合があるでしょうし、当日参加が多いのは賑やかで準備する側としても嬉しいことでありますが、上記のような事情もあります。次期大会の参加者の方が配慮して下さいれば幸いです。

広島大会雑感

西 駕 秀 俊 (産業医科大学, 分子生物)

学会全体を見渡してどうこうというのは、どなたか適当な方が書かれるであろうと考え、私はごく個人的な感想を気ままに述べさせていただくことにする。

今回は一番最後のセッションで座長をすることになったこともあって、座長がどの様に会を進行させていくのか興味を持ちながら聴いていた。座長を勤める場合、口演が終わって直ちにそこで質問の手が挙がるような時には、進行は楽であるけれども交通整理に終始することになりかねない。自分の言いたいことがある場合など、うまくタイミングを見計らって述べることは（少なくとも私には）なかなか難しい。質問などがほとんど出てこないような時、多くの人は形式的な質問をしているようである。それでいいのだろうか？ 案外難しい。けれども良い質問が飛び出したときとか、自分の考えていたような質問が出てくると、なんとなくうれしくなる。今回、もちろん全てのセッションを見聴きしたわけでもないが、冒頭のセッションでの F さんの的確なリードとか、K さんのやや辛口のコメントを交えながらの座長ぶりは、印象に残った。

発生物学会では、以前から院生を中心とした若い人からの発言が多く良いことだと思ってい

るが、年々、年長の先生方の発言が少なくなっているのではないかという気がする。また今回は、このセッションに出ていただけたらと思う何人かの先生がいらっしゃらなかったのが残念な気がした。他人の事はよくわからないけれども、誰しもこの人には是非とも自分の仕事の話を聴いてもらいたい、というような人が一人二人はいるのではないかと思う。一般に自分の仕事の話を聴いてもらい、comment とか suggestion をもらうのは有難いことであるし、とくに自分なりに仕事を始めた者にとっては、そのような人から意見が聴ければ励みにさえなろうというものである。年会は、そのような interaction を持てる数少ない機会の1つであることを想えば、おこがましい言い方かも知れないが、年長の先生方のさらに積極的な参加、発言をお願いしたい。(一方、団先生が元気なお姿を見せてくださったことは、素直にうれしく思った。)

最後になったが、学会場はモダンな建物で明るく気持ちよかった。また、ポスター会場から外を見やると、元安川の河川敷が見られ、懇親会の席上天野先生がおっしゃったように、潮の満ち干につれ全く違った様相を呈するのが面白かった。A会場で縦方向のスライドの入り具合を考慮したためか、ちょっと図が小さめだったかなとか、B会場がもう少し大きければ、など思ったが asking too much かもしれない。天野先生、嶋田先生はじめ裏方の方々にご苦労様でしたと言いたい。

10 年 ぶ り の 広 島

阿 形 清 和 (基生研)

よく考えると、広島に来たのは10年ぶりだった。思うに、前回きたのも発生生物学会の大会(第13回大会、1980年)があったからである。そして、実は、私が初めて発生生物学会で発表したのが10年前の広島での大会だった。菅野先生が世話人で、広大歯学部のカンパス内の階段教室が会場だった。暗い教室の片隅で培養細胞のスライドを頭の中で反復し、緊張しながら自分の出番を待っていたことを憶えている。しかし、広島の街並については全く思い出せない。気の弱い私はそれほど緊張し、精神的な余裕などなかったのである。

あれから10年、学会会場は近代建築の建造物になり、発表の演題には10年前の学会では考えられなかった遺伝子の話が並び、ポスターセッションに人が溢れている。そして、私が気の弱い人間であることを誰も信じなくなってしまったし、3日もいると広島の道路地図がイメージできる余裕さえでてくる。夜の宴会も、昔はおごって貰っていたのが、今ではおごる立場になっている。時の流れというのは恐ろしいものである。

それでは、1980年の広島と1990年の広島 — 少し比較してみよう。

	1980年	1990年
演題数	97題	145題
	(口頭のみ)	(口頭88題ポスター57題)
発表形態	口頭発表のみ	口頭・ポスター併用
発表時間	20分	15分
	(発表15分討論5分)	(発表12分討論3分)
スライド枚数制限	なし	10枚
会場数	2	2
懇親会	初日	二日目
	(3000円)	(4000円)
シンポジウム	60分×4題	55分×3題
特別講演	90分×1題	なし
終了時間	3日目16:20	3日目12:15

このようにして見ると、一番驚くのが口頭発表数が10年前の方が多いいにもかかわらず発表時間と討論時間が長かったことだろう。ポスターがあるじゃないかといっても、ポスター時間は2時間で、10年前には1時間30分の特別講演(フランスの Le Douarin 女史が講師)をやっている。どうしてそんなことになるかという、発表時間が長い分を昔は3日間めいっぱいやることによって補っていたことになる。それだけ、昔は発表時間20分にこだわっていたことがわかる。遠くから来た人達は、最終日も一泊していたに違いないのである。

では内容についてはどうなったかという、10年前は1会場がウニ・ヒトデで、もう1会場がそれ以外といった構成になっている。今回は半分が遺伝子で、もう半分がそれ以外といった感じになりつつある。これも時の流れというもので、今さらとりあげることもなからう。10年を比較して、一番感じたことは、10年前から研究の興味が一貫して、それを着実に進めている人が結構いることである。そして、それらの研究は間違いなく聞くものに説得力のある研究となっている点であろう。このあたりは発生物学会の一つの味わい深いところでもある。私も毎回聞くのを楽しみにしているいくつかの研究がある。目的に向かってどの様にして技術的な問題点を克服していったか、前回発表時で知っていたことがどうなったか。このような発表には、私と同じ様な気持ちで聞きにきている人が結構いることも知っている。これらに加えて、毎回登場してくる新鮮な研究発表とが混在して発生物学会は毎年おもしろくなっている。それは、私の聞く演題数が毎年増えてきていることからもうかがえる。

次回の広島での大会は2000年ということになろう。今回会場のロビーで発表前に緊張した面もちで発表内容を頭の中で必死に反復している若い研究者を何人か見かけた。10年前の自分を見つめながら、10年後に訪れるであろう21世紀の広島で、彼らの研究がどのように展開して我々を楽しませてくれるかを楽しみにしている。

大会の感想

佐々木 洋（東北大・抗酸菌研・細胞生物）

第23回の発発生物学会大会に参加しての個人的な感想を思いつくままに書いてみたい。

今大会で私の印象に残っているのは、ジーンターゲッティングを行なったトランスジェニックマウス作成の試みや、エンハンサートラップ法を用いたショウジョウバエ成虫原基の形態形成遺伝子同定の試みといった、時代の流れに沿った研究の発表がそれぞれ複数のグループで行なわれたことである。それらは今後の発展を期待させるものであり、また、日本でも少数ながらそのような方向で研究をしているグループがあるのかと、興奮したのを覚えている。

しかしながら、今大会を全体を通して見たときにそれほど盛会であったという印象が無い。それほど盛会であったという印象がない原因は、おそらく、発表に画期的なものが少ないということではなく、発表に対する討論があまり深く行なわれなかったところにあると思われる。発表の後、即座に質問が出て、その後次々に質問の手が上がりとても全ての質問を受けきれないといった発表は数えるほどしかなく、発表後、ややあってから質問が出て、座長の質問も合わせてボツボツと質問が出て時間が終わるといった場合が多かったような気がする。伝え聞くとところによれば、その昔(?)は発発生物学会では非常に激しい討論が行なわれ、それが本学会の魅力だったそうであるが、その点については、私の知る限り（ここ5年間）あまり他の学会と変わらないような気がする。ではなぜ、討論がされなくなったのか。決して、発表が討論に値しないというわけではないだろう。主な原因は二つあると思う。ひとつは、会員が増えすぎたために、会員間のつながりが薄くなり、その結果、遠慮があって、忌たんの無い意見が言いにくくなったことである。また、もうひとつ考えられることは、会員の増加で、発表内容が多様化し、バックグラウンドを良く理解できる人が限られてきてしまい、そのために、深い議論が行なわれにくくなったということである。実際、今回の大会で単なる知識を問うような質問がしばしば行なわれたことは、このことを示していると思う。

ではどうすれば、これを解決できるだろうか。会員が増えすぎたからといって今更、会員数を減らすというのは不可能であろう。そこで、次のような2つのことを提案したい。ひとつはポスター発表を増やすことである。ポスターならば、大きな会場で討論するときのような緊張感もなく、また時間や形式の制約もないので、あまり面識が無い人でも議論がしやすい。実際、私は、今回のポスター発表で、かなり辛らつなものも含めて、多くの示唆をいただいた。但し、今回のようなポスター発表の形式では、演者が説明時間の間1カ所に拘束されるため、演者は他の方の発表を聞くことができなくなる（今大会は、私はポスターの演者だったため、他の方の発表をほとんど聞くことができず、そのことがいまだに残念である）。この点は、説明の時間を細かく分けたり、関連した演題ごとにいくつかのグループに分け、それぞれのグループ内でポスターを順番

に説明してゆくなどする事により、演者もなるべく多くの演題を聞かれるように工夫することが必要だと思う。もうひとつの方法は、会員数を思い切ってさらに増やすことである。この提案は一聞すると討論のし易さを奪うように感じるかも知れない。確かに、学会員全体としてのつながりは薄くなると思われるが、参加者が思い切って増えれば、各々の仕事についてバックグラウンドを良く理解できる人も増えるだろう。そうなれば、当然、その人たちの間で深い討論が行われるようになるのではないかと思う。実際、本学会で発表していなくても、発生について他の学会などで興味深い発表をしている方が少なからずいらっしゃいますし、そういった方々が本大会に参加するようになれば、議論が活発になると期待されます。本大会で発表なさらない方はおそらく本学会の存在をあまり良く知らないのではないかと思います。そこで本会の存在を広く知ってもらうために、例えば学会が主催して公開シンポジウムを行なうなど、宣伝になることを行なったらどうかと思います。

思いつくままに勝手なことを書いてしまいましたが、来年度の大会が、より実りのあるものになることを期待します。

第23回 発生生物学会大会をふりかえって

大 隅 典 子（東京医歯大・歯・顎研・発生）

今回、事務局から原稿の依頼をいただき、僭越ながらお引受けさせていただくことになりましたが、正直なところそのような心づもりで学会に参加していたわけではありませんでしたので、何から書いたらよいのか、いざキーボードの前に座って唸っています。しかたなく、6年前の要旨集をひっぱり出してきました。

はじめて発生生物学会に参加したのは第18回の名古屋で開かれた大会でしたから、もう6年前のことになります。このときはポスターのみの大会だったのですが、発生生物学を始めて間もない私は、見ること、聞くこと、何もかも新鮮で（当時どこまで内容を理解できていたのか？ですが）、ポスターの前を行き来していたのが、つい昨日のことのよう思い出されます。教室の先輩方が御存知の方々になつかしそうにご挨拶をされている後ろで、借りてきた猫のように様子を窺っていたものでした。ところが6年の歳月は（たった6年で！）ひとの立場を変えるもので、1年ぶり、数カ月ぶり、あるいは中には1週間ぶりで会う知人に、“こんにちは！ お元気ですか”とか、“お久しぶりですね”などと声をかけたりかけられたりするようになりました。

いま、こうして第18回の要旨集を開いてみると、手書きの抄録の方が圧倒的に多いのにたいへんびっくりしました。今回の場合にはワープロ書き（？）の方が大勢を占めており、ほんの数年の間にワープロは浸透したのだと、いまさらながらに感動しています。ワープロはほんとうに便利な道具で、どんなに教授に赤ペンを入れられても恐くない（！）のはありがたいのですが、い

かにもその人の人柄が偲ばれるような手書きの抄録も、味わい深いものです。ともあれ、発生生物学会の抄録はスペースが多く、図表や写真まで載せられるのがとてもよいと思います。興味のある発表について事前に予習するときにとっても役立ちますし、またあとから振り返っても、かなり詳しく書かれているので参考になります。今回残念だったのは、シンポジウムの要旨が載っていなかったことで、日頃勉強不足の分野であっただけに、少しでも理解の助けになるものがほしかったと思います。

さて、肝心の学会の方の感想はというと、まず、会場となった広島県情報プラザが新しくきれいであったことが印象に残っています。近年は、地方の会場の方が最新の設備を備えており、東京近辺にはあまりよい会場が少ないような気がします。例年通り、オーラルはA、B 2会場を使って進行していましたが、A会場に比してB会場が少し狭いように感じられました。そのため、ときには会場の後ろや通路まで立見の人があふれることもあったようでした。活気があるのはたいへん好ましい学会発表の姿ですが、あまり熱気がこもるのはかえって眠くなるので困りものです。

いちばん活気（熱気も！）があったのは、初日の午後のポスター説明のときでした。すべての演題の説明が同時に始まったので、ポスター会場はさながら歳末のアメ横のように人垣をかき分けることさえ困難を極めていました。結局、説明を受けたいと思っていた演題すべてを見る前に、疲れ果てて休憩室に避難する有様となりました。年々、ポスターの質は向上しており、見やすく親切的な表現方法を工夫されているように思われ、それだけに、直接演者と討論することがもっとできたらよかったのにと残念でなりません。

内容的には、“分子の言葉”で話されている演題がさらに多くなってきたようです。（その分、特殊な材料を用いていた、いわゆるオーソドックスな実験発生学的な研究が少なくなってきているのでしょうか。）藤沢先生のヒドラの系で、ついに刺細胞分化の過程で特異的に発現する遺伝子の解析にまでご研究が発展したのを聞きし、分子生物学的手法が普遍的なものとなっていることをあらためて感じました。その反面、モノクロナル抗体の作製、遺伝子のクローニングなどがごくあたりまえにおこなわれ、どのような系でも同じようなアプローチの仕方に偏る傾向があるのも否めない事実です。“分子の言葉”のうしろに発現現象が観えるような研究であってほしいと思います。

さらに進めていけば、パターン化された strategy にのっとった“先にやったが勝ち”的な研究ではなく、ひとがあとと驚くような着眼をしたり、エレガントな解析方法を工夫した研究が傑出することを、心から期待してやみません。それが可能なのはこの発生生物学会をおいてほかにはないのではないのでしょうか。

最後に、大会の運営を行ってくださった広島大学の方々に、この場をお借りして感謝の言葉を述べさせていただきます。また来年も参加できるように願いつつ、セーブキーを押したいと思えます。

来年度の日本発生生物学会大会開催に関してのお願い

第24回大会準備委員長 安 増 郁 夫

来年度の日本発生生物学会大会は、例年より多少遅れて、6月に東京で開催されることが決定いたしました。来年度大会開催にあたって、例年より多少遅れるという期日変更以外に、手続き上の変更が計画されています。一つは、在外会員からの申し入れを運営委員会で議論した結果、大会参加申込みの書式に英文を追加するという変更です。勿論、申込みの書式の記入は英文での記入を要求するわけではなく、今まで通りの記入でよろしいのですから、この変更は実質的なものではありません。一方、申込みに際しての実質的な変更もあります。来年度大会で講演を申し込まれる方は、申し込み要旨に講演の題名、著者名、所属を、日本語と英文で記入していただくことになります。

来年度大会以降、DGDに英文の大会講演要旨を掲載することが停止されます。このことは、運営委員会で決定され、総会で了承されました。このため、発表要旨集に多少なりとその代役を期待して、要旨集に英文タイトルを付し、それぞれの講演の英文タイトル、著者、所属を目次として、付け加えたいと考えております。申込みが多少煩雑になりますが、よろしくお願いいたします。

これら申込み書式の変更と英文講演要旨を必要としなくなった点を除けば、これまで行なわれてきた大会と同じような形式の大会を準備致したいと思っておりますが、シンポジウム企画を含めて大会運営に、会員各位のご意見を頂ければ、出来るだけご意見に添って努力いたします。末筆ながら、多くの会員の方々が大会にご参加くださることを心からお願いいたします。

事務局より

●前号のサーキュラーに間違いがありましたのでお詫びすると共に、訂正させていただきます。1989年度決算で英文校閲料と分類すべき収入の一部を超過ページ代として分類していたことが前編集主幹の米田満樹先生の指摘により明らかになりました。1989年度決算報告書の中で、英文校閲料を175,000円から325,000円に15万円増額し、超過ページ代を498,000円から348,000円に15万円減額させていただきます。その他の項目は決算報告書の通りです。また収入総額、支出総額などにも変更はございません。ただし、これに伴い、先日の総会で御承認頂いた1990年度予算案も若干変更させていただきます。即ち、収入の項目で英文校閲料の収入を150,000円と見積っていましたが、これを20万円増額して350,000円に、超過ページ代の収入を500,000円と見積っていましたが、これを20万円減額して300,000円に変更させていただきます。他の項目に変更はございません。収入総額、支出総額などもそのままです。以上訂正させて頂くと共に、会員の皆様には重ねてお詫び申し上げます。

●第7回成茂海外出張援助前期分の応募者は3名ありましたが、審査の結果、下記の会員に25万円贈呈することになりました。引き続き後期分を募集しております。詳細は「公募のお知らせ」をご覧ください。

氏 名：一條裕之氏（京都府立医大・病理・大学院生）

出張目的：1990年度北米神経科学協会学術集会に出席して発表する。

発表演題：H. Ichijo, T. Matsuno, and H. Nakamura. Rostrocaudal polarity of avian optic-tectum and ordered nerve connection.

●郵送料を節約するため、役員選挙関係の書類を同封致します。お間違えのないようよろしくお願い致します。

●前号のサーキュラー発行時より現在までに、以下の会員の方からDGD基金へ御寄付を頂きました。厚くお礼申し上げますとともに、お名前をここに記して感謝致します。しかしまだ予算として計上した額に達しないのが現状です。どうか引き続きDGD基金に御寄付頂きますよう、よろしくお願い致します。（巻末の振替用紙をご活用下さい）。

記

DGD基金御寄付者氏名（アイウエオ順、敬称略、6月30日現在）

猪原節之介、上村伊佐緒、岡田 益吉、小山内 実、織井 秀文、加藤 憲一、唐沢健一郎、越田 豊、児玉 隆治、佐藤 矩行、佐野 清、沢田 均、関 俊則、高宗 和史、団 勝磨、辻村 秀信、中辻 憲夫、西宗 義武、能村 哲郎、野田 幸一、野村 晃司、林 謙介、日野 晶也、水野 丈夫、宮崎 俊一、安田 佳子、山上健次郎、渡辺 一雄、渡辺 憲二

公募のお知らせ

学会事務局にいろいろな公募のお知らせがきております。このうち、東レ科学振興会、ブレインサイエンス振興財団、および山田科学振興財団の研究援助については学会の推薦が必要です。学会で推薦を決める関係上、財団の締切り前に学会の締切りをもうけます。今年度は以下のよう
に致します。お間違えのないように、早目に学会事務局へ応募用紙を請求して下さい。

財団名	学会の締切り日
東レ科学振興会	1990年9月15日
ブレインサイエンス振興財団	1990年11月15日
山田科学振興財団研究援助	1991年2月15日

平成3年度日本学術振興会ナポリ臨海実験所派遣研究者募集要項

1. 趣旨

日本学術振興会は、国際学術交流事業の一環として、昭和40年以来イタリアのナポリ臨海実験所 (Stazione Zoologica di Napoli) に研究者を派遣している。なお、この事業は昭和59年度から、本会とイタリア学術研究会議 (National Research Council of Italy-CNR) との間の協定にもとづく研究者交流事業の下で実施している。

2. 応募資格

(1) 短期派遣研究者

我が国の大学等学術研究機関に所属する常勤の研究者 (教授・助教授級)

(2) 長期派遣研究者

- 1) 我が国の大学等学術研究機関に所属する常勤の研究者 (助手級)、又は研究生等として、これらの機関で研究に従事している学位取得者
- 2) 年齢が40歳未満 (平成3年4月1日現在) であること

3. 対象分野

海洋生物学の分野

4. 募集人員・派遣期間

◇短期派遣研究者 1人 15日～30日

◇長期派遣研究者 1人 4～6か月

5. 経費負担区分

◇本会負担：往復渡航費

◇CNR負担：滞在費—短期10万 リラ/日；長期 160万 リラ/月

国内旅費 (イタリア国内) —実費支給 (ただし、短期4か所、長期2か所まで)

6. 申請の方法

申請者は、その所属する大学等学術研究機関の長又は研究指導者の承諾を得て、次の書類を提出すること。

- 1) ナポリ臨海実験所派遣研究者申請書
- 2) 派遣研究者申請者調書

7. 申請受付期間

平成2年8月15日 (水) ～同年9月14日 (金)

8. 選考並びに結果の通知

平成2年9月下旬にナポリ臨海実験所派遣研究者選考会を開催し、派遣研究者の選考を

行う。選考の結果については、10月中旬頃に通知する。なお、派遣に際しては、事前にイタリア学術研究会議の承諾が得られることが必要であるので、正式の採用通知はその結果を待って行う。

9. 連絡先

募集に対する問い合わせ、及び、申請書式の入手の希望等は、下記に連絡すること。

〒102 東京都千代田区麹町5-3-1 (ヤマトビル)

日本学術振興会 研究協力課

ナポリ臨海実験所派遣研究者担当係

電話 (03) 263-1721 (代表)

ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム (HFSP)

1990年度 募集

HFSPは生体のもつ精妙かつ複雑な機能の解明を中心とする基礎研究を国際的に共同して推進し、その成果を広く人類全体の利益に供しようとするプログラム。HFSPは、創造的、独創的な研究を国際的に推進することを目的としており、特に若手研究者による国際的、学際的な研究の奨励に重点が置かれています。HFSPは、1987年のベネチア・サミットにおいて日本政府より提案された国際プログラムです。1989年度の助成費は総額約12百万\$で、1990年度の新規助成費も同程度を予定しています。

募 集

研究グラント／フェローシップ／ワークショップ

研究対象分野

A. 脳機能の解明のための基礎研究分野

1. 知覚・認知機能
2. 運動・行動機能
3. 記憶・学習機能
4. 言語・思考機能

B. 生体機能の分子論的アプローチによる解明のための基礎研究分野

1. 遺伝情報発現機能
2. 形態形成機能
3. 分子認識・応答機能
4. エネルギー変換機能

研究グラント：国際的な共同研究チームに対する研究費助成。チーム代表者は対象国の研究者。

フェローシップ：対象国の研究者が他の国の研究機関に行って研究を行う場合、及び対象国以

外の国の研究者が対象国の研究機関で研究を行う場合を対象とする留学費補助。

ワークショップ：対象国の研究者によってオーガナイズされる国際的な研究集会に対する助成。

注) 対象国は現在、カナダ、フランス、西ドイツ、イタリア、日本、イギリス、アメリカ。詳細についてはガイドブックを参照

問合せ先：(ガイドブック、アプリケーションフォーム請求先)

International Human Frontier Science Program Organization (HFSP)

Tour Europe

20, Place des Halles

67000 Strasbourg, FRANCE

Tel : (France 33) 88. 32. 88. 33

Fax : (France 33) 88. 32. 88. 97

募集の締切：1990年9月28日(金) HFSP 必着

国内連絡先：ヒューマン・フロンティア・サイエンス・プログラム推進室

〒100 東京都千代田区霞ヶ関2-2-1 科学技術庁内 〒100 東京都千代田区霞ヶ関1-3-1 通商産業省工業技術院内

電話番号 直通 03-501-3490

電話番号 直通 03-501-5994

代表 03-581-5271(内線332, 340)

代表 03-501-1511(内線4581~5)

Fax 03-581-3079

Fax 03-501-5953

第1回加藤淑裕記念賞候補者募集要項

1. 趣旨：永年日本における発生生物学の発展に尽くし、1988年に逝去された加藤淑裕博士を記念するために設けられた賞であり、発生生物学の分野において優れた独創的研究を行っている35歳以下の研究者(応募締切日における年齢とする)に対して加藤淑裕記念賞を贈呈するものである。候補者の国籍は問わないが、日本国籍以外の場合は日本での研究の経験があるか、または日本人と共同研究をした研究者を賞の対象とする。
2. 褒賞金：受賞者に賞状ならびに副賞(総額50万円)を贈呈する。受賞件数は2件以内とし、複数の時は賞金を受賞件数で除した額を副賞として受賞者に贈呈する。
3. 応募方法：応募は所定の用紙に必要事項を記入し、コピー6部および関連研究業績別刷各1部を添え加藤淑裕記念事業団に提出する。
4. 応募締切日：1990年9月30日とする。
5. 選考の方法：選考委員会(岡田節人委員長)において選考する。
6. 選考結果および賞の贈呈：1990年11月15日までに受賞者宛に通知する。
7. 連絡および書類送付先

三菱化成生命科学研究所内 加藤淑裕記念事業団

〒194 町田市南大谷11

東レ科学振興会の助成について

(A) 第31回東レ科学技術研究助成候補者推薦要領

1. 候補者の対象：貴学協会に関する分野で基礎的な研究に従事し、その研究の成果が科学技術の進歩、発展に貢献するところが大きいと考えられる独創的、萌芽的研究を活発に行っている若手研究者；またはそのグループ。
2. 研究助成金：総額1億円前後、10件程度としますが、とくに重要と認められる研究については3,000万円程度でも助成を考慮します。
3. 推薦者：学協会の代表者および推薦委員。
4. 候補者推薦件数：1学協会から2件以内および1推薦委員から1件以内。
5. 推薦手続：所定の推薦書用紙に必要事項を記載し、当会あて1部ご送付願います。
6. 推薦締切期日：平成2年10月11日（木）必着
7. 選考方法：下記委員からなる選考委員会を設けて、提出された書類により一次選考を行い、更に面接による二次選考を経て、評議員会において決定します。なお、二次選考対象の代表研究者の方は、平成2年12月下旬または平成3年1月上旬のいずれかに面接をさせていただきます。

選考委員 近藤 次郎（委員長） 今堀 和友 家田 正之 宮澤 辰雄
伊達 宗行 鳥塚 賀治 駒嶺 穆 増本 健

8. 研究助成金の贈呈：平成3年3月の予定

(注) a. 候補者は、必ずしも会員であることを要しません。

b. この研究助成金は、研究目的を達成するために有効に使用されるものであれば、どのような目的にも使われるものを申請されても結構です。ただし、助成金受領後、その用途を変更する必要がある場合は、予め当会の承諾を得ていただきます。

c. 助成金は使用期間の制限がありません。

d. 助成金の受領者は、研究終了時まで毎年「助成研究年次報告書」を、また研究終了時に、「助成研究終了報告書」を提出していただきます。

(B) 第31回東レ科学技術賞候補者推薦要領

1. 候補者の対象：貴学協会に関する分野で、下記に該当するもの

(1) 学術上の業績が顕著なもの

(2) 学術上重要な発見をしたもの

(3) 重要な発明をして、その効果が大きいもの

- (4) 技術上重要な問題を解決して、技術の進歩に大きく貢献したもの
2. 科学技術賞：1件につき正賞：金メダル・副賞：300万円（2件前後の予定）
 3. 候補者推薦件数：1学協会から2件以内（平成元年度に推薦された候補者（注a.）は外数とします）
 4. 推薦者：学協会の代表者
 5. 推薦手続：所定の推薦書用紙に必要事項を記載し、当会あて1部ご送付願います。
 6. 推薦締切期日：平成2年10月11日（木）必着
 7. 選考方法：下記委員からなる選考委員会を設けて選考し、評議員会において受賞者を決定します。

選考委員 近藤 次郎（委員長） 今堀 和友 家田 正之 宮澤 辰雄
伊達 宗行 鳥塚 賀治 駒嶺 穆 増本 健

8. 科学技術賞の贈呈：平成3年3月の予定

（注） a. 推薦を受けた候補者は、その年度および次の年度にわたって選考の対象としております。

b. 候補者は、必ずしも会員であることを要しません。

c. 受賞者は、原則として1件1人とします。

推薦書提出先・連絡先

財団法人 東レ科学振興会

〒279 千葉県浦安市美浜一丁目8番1号（東レビル）

TEL (0473) 50-6103 FAX (0473) 50-6082

「女性自然科学者研究支援基金」よりの助成について

「女性科学者に明るい未来をの会」（1980年創立）は、自然科学の分野で、顕著な業績を収めた女性科学者に、毎年、賞（猿橋賞）を贈呈してまいりました。1991年度からは、さらに、海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する若手の女性研究者にたいし、助成することになりました。なお、賞金と助成金は、1990年3月に本会を母体として新設された、公益信託「女性自然科学者研究支援基金」から支出されることになります。

(A) 猿 橋 賞

1. 本賞は自然科学の分野で、顕著な業績を収めた女性科学者（ただし、下記の推薦締切日で50歳未満）に贈呈します。
2. 本賞は賞状とし、副賞として賞金（30万円）をそえます。
3. 本賞の贈呈は1年1件（1名）です。
4. 所定の用紙に受賞候補者の推薦対象となる研究題目、推薦理由（400字程度）、略歴、主な業績文献リスト、及び、主な論文別刷10編程度をそえて、本会事務所までお送りください。

5. 締切は1990年11月末日（必着）。
6. 第11回の賞贈呈式は、1991年5月、東京において行なう予定です。

(B) 研究助成金

1. 女性研究者で、海外のシンポジウム等に出席し、論文を発表する者に対して行なわれます。
2. 助成金は1件10万円とし、年に3件とします。
3. 所定の用紙に推薦対象者（各締切日において 満40歳未満）の略歴、研究業績、国際会議名（開催場所、年月日）、発表論文題目、推薦理由等を記入して、本会事務所までお送りください。
4. 締切は1990年11月末日と、1991年4月末日の2回。

推薦書提出先及び連絡先

女性科学者に明るい未来をの会

〒166 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217

電話 03-330-2 4 5 5

ブレインサイエンス振興財団の助成について

(A) 第5回研究助成候補者推薦要領

1. 趣旨：ブレインサイエンス研究分野において、独創的で国際的評価に値する研究を助成する。研究分野は、脳神経に関する実験研究のみならず理論・モデリング研究をも含む。候補者は、単独であっても、また共同研究であってもよいが、なるべく若い研究者の推薦を希望する。
2. 研究助成金：助成額は1件100万円、助成件数は8件以内とする。
3. 推薦者：(1)関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。
(2)当財団の理事および評議員とする。
4. 推薦件数：1推薦者から1件に限る。
5. 推薦方法：所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。
6. 推薦締切日：平成2年12月10日（月）とする。
7. 選考の方法：選考委員会において選考し、理事会において決定する。
8. 採否の通知：平成3年3月末日までに推薦者あて、採否を通知する。
9. 助成金の交付：助成決定者に対しては、平成3年5月末日までに研究助成金を送呈する。
10. 助成金の使途：助成金は、推薦書記載の通り使用することを原則とする。なお、経理報告書を平成4年4月中に提出すること。
11. 成果の報告：研究の成果については、平成4年4月中に成果報告を当財団に提出するものとする。また、財団主催の研究会において発表を御願いする。

(B) 第5回塚原仲晃記念賞候補者推薦要領

1. 趣旨：生命科学の分野において優れた独創的研究を行っている45歳以下の研究者（国内外

を問わない。) に対して塚原仲見記念賞を贈呈する。

2. 褒賞金：贈呈件数は2件以内とし、賞牌ならびに副賞（100万円）を贈呈する。
3. 推薦者：(1)関係各学会代表責任者または所属機関の長とする。
(2)当財団の理事および評議員とする。
4. 推薦件数：1推薦者から1件に限る。
5. 推薦方法：所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。
6. 推薦締切日：平成2年12月10日（月）とする。
7. 選考の方法：選考委員会において選考し、理事会において決定する。
8. 選考結果の通知：平成3年3月末日までに推薦者および受賞者あて通知する。
9. 塚原仲見記念賞の贈呈 その他：贈呈決定者に対して、別途通知する。

(C) 第4回海外派遣研究助成候補者推薦要領

1. 趣旨：我が国におけるブレインサイエンスの研究の促進を図るため、国際学会、シンポジウム等への参加、あるいは短期間（6カ月以内）の共同研究のための研究者の海外派遣を助成する。ただし、平成3年4月から平成4年3月の間に出発出来るものに限る。
2. 助成予定額：(1)予算として150万円を計上している。
(2)1件あたりの助成額は、往復の航空運賃を主とし、50万円を限度として若干件を助成する。
3. 推薦者：(1)関係学会代表責任者または所属機関の長とする。
(2)当財団の理事および評議員とする。
4. 推薦件数：1推薦者から1件に限る。
5. 推薦方法：所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。
6. 推薦締切日：平成2年12月10日（月）とする。
7. 受入先の承諾書：受入先の承諾書（学会、シンポジウム等参加の場合は、参加証明書または招待状の写を、短期の共同研究の場合は、受入機関または共同研究者の手紙の写）を添付すること。
8. 選考の方法：選考委員会において選考し、理事会において決定する。
9. 採否の通知：平成3年3月末日までに推薦者あて採否を通知する。
10. 助成金の交付：助成決定者に対しては、平成3年4月以降に出発時期に応じて送呈する。
11. 助成金の使途：助成金は、推薦書記載のとおり使用することを原則とする。
12. 成果の報告：帰国後2カ月以内に派遣の成果について、報告書を当財団に提出すること。

(D) 第4回海外研究者招聘助成候補者推薦要領

1. 趣旨：ブレインサイエンス研究分野において、独創的テーマに意欲的に取り組んでいる外国人研究者の招聘（旅費または滞在費）を助成する。ただし、助成金は、外国人研究者を招聘する受入責任者に交付する。
2. 招聘の時期：平成3年4月1日から平成4年3月31日の間に外国の研究者を招聘するもの。
3. 助成予定額：(1)予算として100万円を計上している。
(2)1件あたりの助成額は、往復の航空運賃または滞在費とし、50万円までを限度として必要額を助成する。
4. 推薦者：(1)関係学会代表責任者または受入責任者の所属機関の長とする。
(2)当財団の理事および評議員とする。

5. 推薦件数：1 推薦者から 1 件に限る。
6. 推薦方法：所定の用紙に必要事項を記入し、当財団に提出する。
7. 推薦締切日：平成 2 年 12 月 10 日（月）とする。
8. 選考の方法：選考委員会において選考し、理事会において決定する。
9. 採否の通知：平成 3 年 3 月末日までに推薦者あて採否を通知する。
10. 助成金の交付：助成決定者に対しては、平成 3 年 4 月から必要に応じて受入責任者に送呈する。
11. 助成金の使途：外国人研究者招聘助成金は、推薦書記載のとおり使用することを原則とする。
12. 成果の報告：招聘の成果について、招聘後 2 カ月以内に受入責任者より報告書を当財団に提出すること。

推薦書提出先および連絡先

財団法人 ブレインサイエンス振興財団

〒 104 東京都中央区八重洲 2 丁目 6 番 20 号

電 話 (03) 273—2 5 6 5 (直通)

第 7 回成茂海外出張援助の募集について

成茂科学器械研究所寄付金による海外出張、旅費援助については 1984 年の運営委員会で、

1. 寄付金の使途：日本発生物学会会員が、国際学会出席などを含めた、発生物学の国際交流を深める目的で外国出張する場合の旅費の補助にあてる。
2. 補助金の額：1 名 25 万円とし、年間約 2 件に補助金を支給する。
3. 補助金支給希望者の申し出：補助金の支給を希望する会員は毎年 4 月 15 日または 12 月 15 日までに、必要書類を日本発生物学会事務局を経て会長に提出する。
4. 必要書類：海外出張を予定する会員の所属・氏名、出張の目的、出張場所、出張期間。なお推薦状、相手方の招待状などを添付しても良い。
5. 審査：提出された書類につき、通常 1 月および 5 月に開かれる運営委員会で審査し、候補者を決める。通例、半年毎に 1 名を決定するが、同時に 2 名が候補者となることのできる。

採択された場合は本人に通知し、インフォメーションサーキュラーに掲載する。

のように決まっております。今回第 7 回後期分として 1 名の援助を募集致します。締切は 12 月 15 日です。申請書類は学会事務局までご請求下さい。

山田科学振興財団援助について

(A) 1991年度 研究援助候補推薦要領

援助の趣旨及び内容

1. 本財団は、自然科学の基礎的研究に対して研究費の援助をします。実用指向研究は援助の対象としません。
2. 援助額は1件あたり300～700万円、総額6,000万円、援助総件数は10件程度ですが、学会からの推薦及び本財団関係者からの個人推薦の中から選考します。
3. 援助金を給与にあててはできませんが、他の使途は自由です。
4. 援助金の使用期間は、贈呈した年度及びその次の年度の計2年度間とします。

推薦方法

- イ. 推薦者：本財団が依頼した学（協）会の代表者
- ロ. 推薦件数：1推薦者ごとに2件以内
- ハ. 推薦手続：推薦者は、以下の書類を整え、送付して下さい。(1)所定の推薦書用紙又はその写しに必要事項を記入したもの 4部 (2)添付書類

記載上の注意：代表研究者は、所属のある場合、当該所属の長から本援助の申込をすることについての承諾を得て下さい。

推薦締切期日：本財団へ推薦書が到着する締切日は1991年3月31日です。

選考方法：選考委員会において選考のうえ、理事会が決定します。

選考結果の通知：1991年7月迄に推薦者及び代表研究者等にあてて通知します。

援助金の贈呈：選考結果の通知後、適時贈呈します。

究研の成果又は会計の報告：援助金の受領者に対して、必要に応じ、研究経過、研究成果、又は会計について報告書の提出又は発表を求めます。

付：ご提出いただきました推薦書及び添付書類は、お返しいたしません。

(B) 派遣援助申込要領

援助の趣旨

本財団は、自然科学の基礎的分野における重要かつ独創的な研究に従事する研究者を国外に派遣し、学識を交換して学術の国際交流を促し、又研究を共にして相互に研究の学際的あるいは国際的進展を図る等のために、次のイ. 及びロ. の援助を行う。

- イ. 高度の研究業績を持つ研究者を、講演、討論等を主目的として、短期間（通例3カ月間以内）派遣するための渡航費の援助
- ロ. 高度の研究活動を実施しつつある新進研究者若干名を、協同研究への直接参加を主目的として、長期間（通例6カ月～1カ年間）派遣するための渡航費、滞在中の国内旅費、滞在費等の援助

援助金額：本年度の総額は来日援助と併せて6,500万円の予定

申込手続：所定の用紙又はその写しに必要事項を記入し、次のイ. ロ. の各文書あるいはそれらの写しを添え、おのおの3部ずつご送付願います。

- イ. 短期間派遣にあつては、1. 集会の内容を紹介する文書 例えは、集会のサーキュラー及びプログラム等 2. 講演・発表等の要旨 3. 派遣先と交わした申込者又はこれに代る

人からの往復書信等の連絡書信 4. 研究指導者又は所属機関長の推薦書 5. 最近3カ
年間の研究報告のリスト

- ロ. 長期間派遣にあつては、1. 直接指導者又は所属機関長による本申込及び本研究に対する
評価又は推薦の文書 2. 派遣中の具体的な研究計画書及びそれを本人が英、独あるいは
仏訳したもの 3. 受入先の発行した招へい状及び受入受諾を確証する約定書 4. 派遣
先と交わした申込者又はこれに代る人からの往復書信等の連絡書信 5. 研究報告のリス
ト

申込期限

イ. 短期派遣：出発予定日より4カ月以前の月の15日（例：10月に出発予定のときは6月15日
が申込期限に当たる）

ロ. 長期派遣：1990年11月30日（1991年4月1日～1992年3月31日に出発予定の方）

選考方法：選考委員によって選考のうえ、理事会が決定します。

選考結果の通知：申込者にあてて通知します。

援助金の贈呈：申込者にあてて適時贈呈します。

申込書送付先及び連絡先

財団法人 山田科学振興財団
(Yamada Science Foundation)

〒544 大阪市生野区巽西1丁目8番1号

電話大阪(06) 757局3311(代表)

付：ご提出いただきました申込書は、返却いたしません。

第40回科学講演会のお知らせ

主 催：財団法人 東レ科学振興会

千葉県浦安市美浜一丁目8番1号（東レビル）TEL (0473) 50-6104

後 援：朝 日 新 聞 社

と き：平成2年10月15日（月）

開場 17時30分、開演 18時00分、終演 20時45分

と ころ：よみうりホール

東京都千代田区有楽町1-11-1 読売会館（そごう）7階

（JR線有楽町駅都庁口前）

テ ー マ：光と遺伝子——光は生命現象にどれだけ深く関わっているか——

I. 光による遺伝子の傷害とその修復

京都大・医・教授 武 部 啓

II. 光情報による遺伝子発現の調節

東京大・名誉教授 古 谷 雅 樹

そ の 他：入場無料、定員1,100名（予約なし・先着順）

☆満員の場合は入場をお断りすることがあります。

「地球圏—生物圏国際協同研究計画(IGBP)の実施について(勧告)」を採択

平成2年5月 日本学術会議広報委員会

日本学術会議は、去る4月18日から20日まで第109回総会を開催しました。今回の日本学術会議だよりでは、その総会で採択された勧告を中心に、同総会の議事内容等についてお知らせします。

日本学術会議第109回総会報告

日本学術会議第109回総会(第14期・第5回)は、4月18~20日の3日間開催された。

総会第1日目の午前中には、会長からの経過報告、各部委員会報告に続き、勧告、対外報告の2案件の提案がなされた。これらの案件については、同日午後の各部会での審議を経た上で、第2日目の午前中に採択された。なお、総会前日の17日の午前中には、連合部会が開催され、これらの案件の予備的な説明、質疑が行われた。また、第2日目の午後には、自由討議が、第3日目の午前中には各常置委員会が、午後には各特別委員会がそれぞれ開催された。なお、第2日目の総会に先立ち、同日表敬訪問のために訪れた1990年(第6回)日本国際賞受賞者4名の紹介がなされ、うち2名の方から挨拶が行われた。

今回総会では、次の勧告、対外報告が採択された。

①地球圏—生物圏国際協同研究計画(IGBP)の実施について(勧告)(この勧告の詳細は、別掲参照)

このIGBPについては、以前から会長召集の検討会議や関係する部会、研究連絡委員会等で検討が続けられてきたが、この度、これらの検討結果を踏まえて、人間活動と地球環境に関する特別委員会のIGBP分科会が中心となって今回の勧告案を取りまとめたものである。

この勧告は、同日午後直ちに内閣総理大臣に提出され、関係省庁に送付された。

②人間活動と地球環境に関する特別委員会報告—人間活動と地球環境について(この対外報告の詳細は、別掲参照)

これは、人間活動と地球環境に関する特別委員会が、昭和63年10月の発足以来行ってきた審議の結果を中間報告として取りまとめたものについて、外部に発表することを承認したものである。この件に関する審議の際には、人間活動という言葉の定義、国際関係や各国の科学技術政策との関連、環境教育の位置付け等々について、活発な質疑応答があり、また、文案の修正を求める多くの意見が出される等、熱心な討議が行われた。

また、総会第2日目の午前には、南アフリカ共和国科学者の学術に係る我が国への入国手続きをめぐる従来からの問題について討議が行われ、「科学者の自由交流」の考え方に賛同し、本問題の早急かつ実質的な解決を望む多数の意見が述べられた。

なお、第2日目午後には、「学術の国際化への対応」というテーマで、活発な自由討議が行われた(この自由討議の詳細は、別掲参照)。

地球圏—生物圏国際協同研究計画(IGBP)の実施について(勧告)

(勧告本文)

国際学術連合会議(ICSU)は、1983年1月の執行委員会から、国際測地学・地球物理学連合(IUGG)より提案のあった地球圏—生物圏国際協同研究計画(International Geosphere-Biosphere Programme, 略称IGBP)について検討を始め、1986年ベルンで開かれた総会で、この計画を1990年から10年間国際協力により実施することを決定した。我が国の研究者は国際的立案の段階からこの研究計画の審議に参加してきており、この国際協力事業に我が国の研究者が参加することは、この国際協同研究計画が持つ重要性にかんがみ意義が極めて大きいと考えられる。したがって、政府はこの国際的かつ学際的事業を成功させるために、我が国におけるIGBP研究の実施に当たり、研究の推進、国際対応、研究者の養成などの体制整備並びに予算等万全の措置を講じられたい。

(説明)[要旨]

国際学術連合会議(ICSU)は、国際協同研究として、地球変化を支配する物理的・化学的・生物学的な諸過程とその相互作用を解明するため専門的知識を結集し、「地球圏—生物圏国際協同研究計画(IGBP)を実施するため、検討を行ってきた。我が国の研究者は関係する国際委員会に参画し積極的にその役割を果たしてきた。

IGBPの目的は全地球を支配する物理的・化学的・生物学的諸過程とその相互作用を究明することによって、過去から現在、未来にいたるまでの生命を生み出している地球独特の環境とその変化、さらに人間活動による変化について解明し、記述し、理解することである。

我が国における実施計画は、国際的な計画を参照しつつ、次の7研究領域を設定した。

研究領域1: 大気微量成分の変動及び生物圏との交換。

研究領域2: 海洋における物質循環と生物生産。

研究領域3: 陸上生物群集への気候変化の影響。

研究領域4: 大気圏・水圏・陸圏と生物圏の相互作用を考慮した気候解析とモデリング。

研究領域5: 環境変化のモニタリング

研究領域6: 古環境の変遷。

研究領域7: 地球環境と人間活動の相互作用。

本研究計画は1990年から10年間行われ、日本は広義のモンスーンアジア地域、西太平洋地域、極域に特に重点をおいて研究を実施する。また、効果的に推進するため、地球システムにかかわる他の国際協同研究とも協力する。

人間活動と地球環境に関する特別委員会報告 —人間活動と地球環境について(要旨)

人間活動とそれをとりまく環境については、ギリシャ・ローマ時代以来考察されてきた。最近に至り、工業化や都市化が早い速度で展開し、その影響は局地的にとどまらず、地球規模で進行し、地球環境の急速な変化が現れてきた。特に、二酸化炭素や微量気体の温室効果に起因する地球温暖化、酸性雨、砂漠化などさまざまな環境変化が現れている。そしてその進行速度が大で、人間として対応、適応または順化する変化の速度の限界を越しているところに問題がある。

地球の規模の環境変化研究の国際的プロジェクトとして「地球圏—生物圏国際協同研究計画(IGBP)」があり、少し遅れて実施される予定の「地球変化の人類次元研究計画(仮称)(HDGCP)」がある。

問題を解決するためには、人間活動と地球環境を一つの系としてとらえ、そこにおける物質循環やエネルギー変化の定量的記述に基づき、あるべき姿を検討し、新しい技術体系や政策体系を構築する。そこでは、総合的な研究体制を構築するプログラムを用意する必要がある。このような新しいしかも長期的な研究を推進するためには、研究者の養成、教育体系の検討、全学術研究体系の整備が必要である。

総会中の自由討議—学術の国際化への対応

本会議総会中の行事の一環である自由討議が、総会2日目の4月19日の午後1時から3時間にわたり開催された。今回の課題は、「学術の国際化への対応」であった。

自由討議は、大石泰彦副会長の司会のもと、はじめに話題提供として、①川田侃第2部会員から「学術の国際化への対応—政治学の場合」について、②高柳和夫第4部会員から「学術における国際対応—理学の場合」について、③松本順一郎第5部会員から「日本学術会議と国際学術協力」について、それぞれ意見の発表がなされた。

続いて、会員間で多岐多様にわたり活発な討議が行われたが、その陳述べられた意見の主なもの項目として列挙すると、「日本全体の国際学術交流・協力事業に占める日本学術会議の位置付け、役割」、「特に発展途上国からの研究者、留学生の受入れ問題」、「ユネスコ関係の諸活動・事業への対応の在り方」、「日本学術会議が加入している各国国際学術団体への対応の個別的な現状と問題点」、「新しい国際協力事業への日本学術会議の対応の在り方」、「日本学術会議の国際対応組織の整備・強化」等であった。

経営工学研究連絡委員会報告—経営工学の 体系化に向けて(要旨)

固有技術とよく調和した管理技術の体系を明確にし、この体系の研究を進めて行くことは高度技術社会における社会組織と企業経営のあり方を検討するのに重要な意義を有する。

今までも、経営工学は日本の経済、社会及び技術の発展段階において、その役割を果たし、日本経済の発展に貢献してきた。とくに日本製品の品質と生産性と向上に果たした経営工学の役割は広く内外において高く評価されているところである。

経営工学の理論と応用の研究は、その実学的な性格もあり、企業における工学・技術を基盤とする経営管理活動に

重点がおかれていたが、経営工学の理論は広い普遍性を有しているため、今後は広く社会や国際に関する問題にも応用されなければならない。

本報告は、このような意図の下に、経営工学研究連絡委員会に参加している4学会の代表者よりなるワーキンググループの協力の下に、経営工学の役割と学問的体系を整理し、その研究と教育のあり方と今後の展開を考察したものである。

生物物理学研究連絡委員会報告—生物物理学の 新しい研究体制について(要旨)

生物科学の急速な進展の中で生物物理学は生物機能のメカニズムを物理学的に解明し、生物科学全体の基礎を形づくる学問として、多くの貢献をしてきた。今後生命現象の基本的理解をめざすのみならず、バイオテクノロジーの基盤となるべく、生物物理学の役割はますます大きい。

このような状況の下で、生物物理学の一層の発展をはかるには、以下のような新しい研究体制をつくることが望ましい。

現段階で特に集中的総合的に研究を推進すべき分野として、(A)分子機能解析(B)生物情報解析(C)高次情報解析の三つをとり上げる。それぞれの分野に適合した場所に研究室群(研究センター)をおき、それらが相互に連携し、一つの研究組織を作る。さらにこの組織が物理的方法を軸として新しい大型の研究設備のシステムを備える。そして将来この体制が基礎生物科学の研究体制の重要な一環となることをめざす。

日本学術会議第15期会員選出のための学術 研究団体の登録について

現在、日本学術会議会員推薦管理会では、各学術研究団体から、第15期会員選出のための日本学術会議への「登録」申請の受付を行なっています。この「登録」は、期が変わる度に行う必要があり、従って、第14期における登録学術研究団体も第15期会員選出のための登録学術研究団体となるためには、改めて第15期の「登録」が必要です。

この「登録」申請を行うためには、所定の様式による「学術研究団体登録申請書」を、平成2年6月30日(土)までに日本学術会議会員推薦管理会に到達するように提出する必要があります。

「学術研究団体登録申請書」は、所定の様式と用紙がありますので、日本学術会議会員推薦管理会に請求してください。無料で送付します。

日学双書の刊行案内

日本学術会議主催公開講演会の記録を中心に編集された次の日学双書が刊行されました。

- 日学双書 No.6 「高齢社会をどう生きるか」
 - 日学双書 No.9 「"人権の歩み"から何を学ぶか」
- [定価] 両書とも、1,000円(消費税込み)

※問い合わせ先：(財)日本学術協力財団(〒106 東京都港区西麻布3-24-20、交通安全教育センタービル内、電話03-403-9788)

御意見・お問い合わせ等がありましたら、下記までお寄せください。

〒106 東京都港区六本木7-22-34

日本学術会議広報委員会 電話03(403)6291

会 員 異 動

<新入会員>

(氏 名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ, ②材料)
宮崎 淳一	筑波大・生物科学系	〒305 つくば市天王台 1-1-1	①発生に伴うタンパク質 蓄積の同調性 ②ニワトリ
宇井久美子	日本医科大・薬理	〒113 文京区千駄木1-1-5	①ハエ成虫原基及び幼虫 中枢神経細胞の培養 ②ショウジョウバエ
高田 裕美	愛媛大・理・生物	〒790 松山市文京町2-5	①カエル肝実質細胞にお ける分化形質発現 ②アフリカツメガエル
岡崎 賢二	久留米大・分子生命 研・遺伝	〒830 久留米市合川町2432-3 リサーチセンタービル内	①初期発生の分子生物学 ②脊椎動物
（学）勝部 憲一	慶応大・医・分子生 物	〒160 新宿区信濃町35	①マウス初期胚における 細胞の増殖と分化 ②マウス胚性幹細胞
（学）喜納 宏昭	金沢大・理・能登臨 海実験所	〒927-05 石川県珠洲郡内浦町 小木4-1	①受精と卵形成 ②バフンウニ, ムラサキ ウニ
（学）小清水右一	大阪大・微研・動物 実験	〒565 吹田市山田東 2-23-12	①生殖細胞の形成と分化 ②マウス精巣
（学）厚地 靖雄	九州大・理・生物	〒812 福岡市東区箱崎6-10-1	①アルドラーゼ遺伝子の 発現調節 ②アフリカツメガエル
相沢 慎一	理研・筑波研究セ	〒305 つくば市高野台3-1-1	①哺乳動物遺伝学 ②マウス
山元 大輔	三菱化成生命研・脳 神経	〒194 町田市南大谷11	①神経回路の形成機構 ②ショウジョウバエ
（学）八木 健	理研・筑波研究セ	〒305 つくば市高野台3-1-1	①細胞間相互作用におけ る細胞接着構造の役割 ②マウス
（学）平野 敏夫	東京大・医科研・生	〒113 文京区本郷6-5-10	①複合糖鎖の構造解析

(氏 名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ, ②材料)
	物有機化学	香川方	②ブタ卵子
(勞)清水 健	金沢大・理・能登臨 海実験所	〒927-05石川県珠洲郡内浦町 小木4-1	①精子先体反応誘起物質 の構造と機能
			②ウニ
(勞)吉原基二郎	東京大・理・物理・ 堀田研	〒113 文京区本郷7-3-1	①神経発生分子遺伝学
			②ショウジョウバエ
山本 芳実	浜松医大・医・生物	〒431-31浜松市半田町3600	①哺乳動物の受精と発生
			②マウス, ラット, ハム スター
篠沢 隆雄	群馬大・工・生物化 学工学	〒376 桐生市天神町1-5-1	①再生と誘導
			②プラナリア
松野 享	京都府立医大・生物	〒603 京都市北区大將軍西 鷹司町13	①神経発生学
			②ニワトリ
高村 克美	福山大・工・生物工 学	〒729-02福山市東村町字三蔵 985	①生殖細胞の分化機構の 解析
			②ホヤ, 線虫
佐野 亨	日本電気(株)・基礎研 ・探索	〒305 つくば市御幸が丘34	①発生を司る遺伝子, 神 経系の遺伝子
			②線虫
伊藤 道彦	三菱化成生命研	〒151 渋谷区上原1-25-12 藤堂方 201	①哺乳類の生殖系列にお ける遺伝子発現
			②マウス
山野 恵祐	水産庁・養殖研	〒519-04三重県度会郡玉城町 昼田224-1	①魚類変態の内分泌学
			②ヒラメ
山形 方人	愛知医大・分子医科 学研	〒480-11愛知県愛知郡長久手 町大字岩作字雁又21	①細胞間相互作用, 組織 構築
			②マウス, ニワトリ, ヒト
近藤 壽彦	群馬大・内分泌研・ 物理化学	〒371 前橋市昭和町3-39-15	①性の決定機構
			②アフリカツメガエルな どの両生類
上村 匡	京都大・理・生物物 理	〒606 京都市左京区北白川 追分町	①発生・再生における細 胞間相互作用
			②ショウジョウバエ
(勞)永吉 道隆	熊本大・理・生物	〒860 熊本市黒髪2-40-1	①色素胞の分化と移動の

(氏名)	(所属)	(住所)	(①テーマ, ②材料)
			機構
神尾 一彦	熊本大・理・生物	〒860 熊本市黒髪2-40-1	②アフリカツメガエル ①モノクローン抗体を用いた核タンパク質の同定
一條 裕之	京都府立医大・医・病理	〒602 京都市上京区河原町通 広小路上ル梶井町465	②Cynopus pyrrhogaster ①脳・神経系の発生 ②脊椎動物
真鍋 純一	熊本大・理・生物	〒860 熊本市黒髪2-40-1	①モノクローン抗体を用いた初期発生の研究 ②アフリカツメガエル
後藤 聡	東京大・理・生物化学	〒113 文京区本郷7-3-1	①発生における位置情報の分子機構 ②ショウジョウバエ
犬塚 弘幸	京都大・理・生物物	〒606 京都市左京区北白川 追分町	①細胞間相互作用 ②ニワトリ
宮林 朋之	名古屋大・理・分子生物	〒464-01 名古屋市千種区不老町	①マウスの発生過程におけるHox 遺伝子の機能 ②マウス
塩見 健輔	京都大・理・生物物	〒606 京都市左京区北白川 追分町	①細胞間相互作用 ②ショウジョウバエ
藤森 俊彦	京都大・理・生物物	〒606 京都市左京区北白川 追分町	①細胞間相互作用 ②アフリカツメガエル, ニワトリ
東海林博樹	名古屋大・理・分子生物	〒464-01 名古屋市千種区不老町	①哺乳類発生過程における遺伝子発現調節機構 ②マウス
野口 茂	明治乳業ヘルスサイエンス研・発生生物	〒250 小田原市成田540	①相同組換による変異マウスの作製 ②マウス
弥益 恭	埼玉大・理・生体制御	〒330 太田市東大宮5-11-1 プレステージ東大宮 303	①動物初期発生の遺伝子レベルでの調節機構 ②ウニ
板崎 伸栄	京都府立医大・生物	〒603 京都市北区大将西鷹	①心臓および神経系の発

(氏 名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ, ②材料)
		司町13-2	生
嶋大山みちえ	愛媛大・理・生物	〒790 松山市文京町2-5	②ニワトリ胚 ①卵割・細胞接着
嶋藤田 弘子	愛媛大・理・生物	〒790 松山市文京町2-5	②バフンウニ ①細胞分化・細胞間の接 着
嶋太田 一正	東邦大・理・生物	〒274 船橋市三山2-2-1	②バフンウニ ①ウニ初期発生中のアセ チルコリンエステレー スの研究
嶋玉井 淑貴	大阪大・微研・細菌 ウイルス	〒567 茨木市南春日丘5-7- 55-202	②バフンウニ ①マウス初期胚の発生 ②マウス・テラトカルシ ノーマ
嶋高倉 暁彦	広島大・総合科学・ 天野研	〒730 広島市中区東千田町 1-1-89	①カエル肝細胞の成熟・ 分化 ②アフリカツメガエル
嶋井上 直子	東京大・理・生物化 学	〒113 文京区本郷7-3-1	①ショウジョウバエの神 経発生学 ②ショウジョウバエ
嶋箕田 康一	北海道大・理・動物	〒060 札幌市北区北10条西 8丁目	①精子形成 ②ニホンヒキガエル, ア フリカツメガエル
嶋井筒 ゆみ	広島大・理・動物・ 形態	〒730 広島市中区東千田町 1-1-89	①表皮細胞について ②ウシガエル
民谷 栄一	東京大・先端科学技 術研究セ	〒153 目黒区駒場4-6-1	①ルシフェラーゼ遺伝子 の発現制御機構 ②メダカ
西山 宣昭	九州大・中央分析セ	〒816 春日市春日公園6-1	①細胞間コミュニケーションと細胞増殖
内藤 充	農水省・畜産試験場	〒305 茨城県稲敷郡茎崎町 池の台2	①形質転換ニワトリの作 製 ②ニワトリ, ウズラ
柳 明	石巻専修大・理工・	〒986 石巻市南境新水戸1	①有性生殖過程の制御機

(氏 名)	(所 属)	(住 所)	(①テーマ, ②材料)
	生物生産工学		構
川瀬栄八郎	明治乳業ヘルスサイ エンス研・発生生物	〒250 小田原市成田540	②ゾウリムシ ①発生工学的手法を用い て発生現象を解析する
小山 英樹	岡山大・歯・第一口 腔外科	〒700 岡山市鹿田町2-5-1	②マウス ①発生初期の形態形成に かかわる遺伝子の検出
鰐渡部 美穂	愛媛大・医・第一解 剖	〒791-02愛媛県温泉郡重信町 見奈良801-1 富田ハイッ302	②ニワトリ, マウス ①鳥類胚における実験発 生学 ②ニワトリ, ウズラ
鰐櫻井 武	名古屋大・医・病態 制御研・がん細胞	〒466 名古屋市昭和区鶴舞 町65	①DNA複製機構の解明 ②真核細胞
鰐高井 裕之	山形大・理・生物	〒990 山形市小白川町 1-4-12	①受精における卵ゼリー 層の役割 ②アカハライモリ
鰐照井 雅巳	山形大・理・生物	〒990 山形市小白川町 1-4-12	①受精における卵門直下 部位の役割 ②メダカ
鰐山濱 由美	山形大・理・生物	〒990 山形市小白川町 1-4-12	①体腔内卵輸送について ②アカハライモリ
鰐足立 勇博	山形大・理・生物	〒990 山形市小白川町 1-4-12	①受精における卵膜の役 割 ②アカハライモリ
鰐大房 健	広島大・理・動物・ 動物形態	〒730 広島市中区東千田町 1-1-89	①細胞死, 再生 ②カエル, ヒト繊維芽細 胞
Jerry Leo Hedrick	Dept. of Biochem. Biophys., Univ. of Calif., Davis, CA 95616, U. S. A.		
Czeslaw J. Jura	Inst. of Zool., Jagiellonian Univ., Karasiab, 30-060 Krakow, POLAND		

<所属・住所変更>

(氏 名)	(所 属)	(住 所)
岩淵 雅樹	京都大・理・植物	〒606 京都市左京区北白川追分町
堀 令司	大垣女子短大	〒503 大垣市西之川町1-109
三輪 錠司		〒235 横浜市新子区杉田坪呑6-30
小浜 一弘	群馬大・医・薬理	〒371 前橋市昭和町3-39-22
北村 幸彦	大阪大・医・病理	〒530 大阪市北区中之島4-3-57
弓削 昌弘	九州大・教養・生物	〒810 福岡市中央区六本松4-2-1
圓山 悠子	家畜衛生試験場・研究第一・実験動物	〒305 つくば市観音台3-1-1
中村 公章	科研製薬(株)・安全性研	〒426 藤枝市源助301
武田 直邦		〒285 佐倉市王子台5-8-10
押尾 茂	東邦大・医・薬理	〒143 大田区大森西5-21-16
榎木戸 充	大阪大・細胞工学セ・細胞工学	〒606 京都市左京区下鴨本町18 第一泉荘8
榎土田 一人	東京理科大・理工・応用生物科学	〒019-06 秋田県平鹿郡十文字町植田58
会津 清英	宮城県総合衛生学院	〒983 仙台市宮城野区幸町4-7-1
北見 正伸	いわき短期大学	〒970 いわき市平鎌田字寿金沢37
佐藤 栄治	熊本大・教養・生物	〒860 熊本市黒髪2-40-1
小田 隆治	山形大・教養・生物	〒990 山形市小白川町1-4-12
入江美代子		〒279 浦安市入船2-3-1006
黒田 行昭	麻布大・生物科学総合研	〒229 相模原市淵野辺1-17-71
西田 隆雄	日本大・農獣医・家畜生体機構	〒252 藤沢市亀井野1866
藤沢 肇	名古屋大・理・分子生物	〒464-01 名古屋市千種区不老町
吉里 勝利	広島大・理・動物・形態	〒730 広島市中区東千田町1-1-89
宇野賀津子	財京都バストゥール研	〒606 京都市左京区田中門前町103-5
三宅 敏彦	塩野義製薬(株)・研・生物化学	〒553 大阪市福島区鷺洲5-12-4
浜崎 辰夫	慶応大・医・生物	〒223 横浜市港北区日吉4-1-1
畑中 公	北里大・医・薬理	〒228 相模原市北里1-15-1
藤原 滋樹	高知大・理・生物	〒780 高知市曙町2-5-1
木谷 裕	家畜衛生試験場	〒305 つくば市観音台3-1-1
榎末松 直也	聖マリアンナ医大・生化	〒213 川崎市宮前区菅生2-16-1
榎三上かおり	帝京大・薬・生理化学	〒199-01 神奈川県津久井郡相模湖町寸沢嵐1091-1
葺石 米孝	塩野義製薬(株)・研・神崎川分室	〒561 豊中市二葉町3-1-1
Raymond Rappaport	Mt. Desert Island Biol. Lab., Salsbury Cove, ME 04672, U. S. A	
Yasushi Hiromi	Dept. of Mol. and Cell Biol., LSA 519, Univ. of Calif., Berkeley, Berkeley, CA 94720, U. S. A	

<退 会>

覚道 幸男, 東 怜, 和田健之介, 藤原 健, 田村 隆明, 窪田 友幸, 山田 雄二,
 松本 豊, 小池 学, 宮井 達也, 榎永 剛一, 前野 貢, 黒田 秀也, 福田 昭男,
 牧野 綾子, 太田 尚孝, 松永 真弓, 三菱化成工業(株)医薬事業部,

〔賛助会員〕

- | | | |
|---|------|---|
| 組織培養はパイレックス・コーニングの岩城硝子㈱ | 〒100 | 千代田区丸の内3-2-3
TEL 03-214-6221 |
| 生物学・生態学洋書のことならグリーン洋書㈱ | 〒211 | 川崎市幸区塚越2-260
TEL 044-533-0470 |
| ㈱武田薬品工業中央研究所 | 〒532 | 大阪市淀川区十三本町2-17-85
TEL 06-300-6835 |
| 試薬・機器の御用命は名古屋片山化学㈱まで | 〒460 | 名古屋市中区丸の内3-11-14
TEL 052-971-6531 |
| 日製産業株式会社 | 〒453 | 名古屋市中村区名駅4-6-18
(名古屋ビル内)
TEL 052-583-5846 |
| バイオテクノロジーで未来をひらく㈱バイオ科学研究所 | 〒990 | 山形市城西町5-34-5
TEL 0236-44-5030 |
| 発生学をはじめとする生物科学書の出版社・培風館 | 〒102 | 千代田区九段南4-3-12
TEL 03-262-5256 |
| 藤本理化 | 〒113 | 文京区向ヶ丘2-34-12
TEL 03-827-8151 |
| 最良の選択ファルコン組織培養器具ベクトン・ディッキンソン・オーバークーズ Inc. | 〒107 | 港区赤坂8-5-34 島藤ビル
TEL 03-403-9991 |
| 三菱化成生命科学研究所 | 〒194 | 町田市南大谷11
TEL 0427-24-6226 |
| マウス・モノクローナル抗体（アロ抗体）は明治乳業㈱ | 〒104 | 中央区京橋2-3-6
TEL 03-271-4333 |
| 試薬及び理化学機器販売理科研㈱ | 〒463 | 名古屋市中村区元郷2-107
TEL 052-798-6151 |
| 科学の技術に奉仕する理工学社 | 〒113 | 文京区本駒込5-9-10
TEL 03-928-5211 |
| 次代を担うバイオテクノロジー和研薬㈱ | 〒606 | 京都市左京区北白川西伊織町25
TEL 075-721-0491 |

(50音順)

広告掲載のお願い

日本発生生物学会は理学、医学、薬学、農学をはじめ分子生物学、細胞生物学、遺伝学など、さまざまな生物学分野で発生生物学の基礎研究に興味を持つ内外の研究者によって組織されている学会であり、国内外に約900人の会員を持っております。

英文学術雑誌 *Development, Growth and Differentiation* は、日本発生生物学会の機関誌で年6回発行し、国内に約1,000部、国外に約600部配布致しております。また会員にはインフォメーション・サーキュラーを年3回配布致しております。

目下、本学会では広告主を募っております。会員各位におかれましても広告主のご紹介等、是非ご協力頂きますようお願い致します。

広 告 料			
DGD本誌	1 頁	年6回	150,000円
	半 頁	〃	78,000円
インフォメーション・	1 頁	年3回	20,000円
サーキュラー	半 頁	〃	12,000円

申し込み先：日本発生生物学会

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部動物学教室内

.....切.....り.....取.....り.....線.....

広告申し込み書

年 月 日

日本発生生物学会 御中

広告の掲載をお願いしたく下記の通り申し込みます。

☐ DGD本誌	1 頁
☐ 〃	半頁
☐ サーキュラー	1 頁
☐ 〃	半頁
住 所	
会 社 名	
担当者名 電話番号	

賛助会員へのご入会のお願い

日本発生生物学会

会 長 安 増 郁 夫

近年、ライフサイエンス、バイオテクノロジー等の言葉が広く語られ、生物学に大きな関心と注目が払われるようになってまいりました。

日本発生生物学会は、発生生物学の進歩と普及をはかるため設立された学会で、日本を主に、外国の発生物学者を混じえて約900名を結集しております。発生物学は、言うまでもなく医学・農学等の諸分野とも深い関連を有しており、最近とみに進展の著しい遺伝情報発現をめぐる諸問題、癌細胞の基礎的研究、老化の問題等も発生物学者の大きな関心の的になっております。日本発生生物学会は、これらの分野での活発な研究者を会員としております。又、本学会の刊行致しております欧文誌“Development, Growth and Differentiation” (DGD) もこの方面の国際的学術雑誌として高く評価されております。

貴社におかれましては、このような学問の重要性をすでに御承知のことと存じます。何卒、本学会趣旨に御賛同の上、賛助会員として本会を御支援賜りますよう御願い申し上げます。

なお、賛助会員は年3回発行される「インフォメーション・サーキュラー」誌上に特記され、本会の刊行する欧・和文刊行物（会員名簿を含む）が配布されます。会費は、一口二万円を申し受けております。御入会の際は、入会申込書を事務局までお送り下さい。

連絡先：日本発生生物学会事務局

〒113 東京都文京区本郷7-3-1

東京大学理学部動物学教室内

.....切.....り.....取.....り.....線.....

日本発生生物学会賛助会員入会申込書

年 月 日

賛助会員として入会の申し込みを致します。

(_____ 口 _____ 円)

住 所

会 社 名

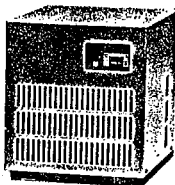
印

担当者名
電話番号

■ 加熱冷却ユニット

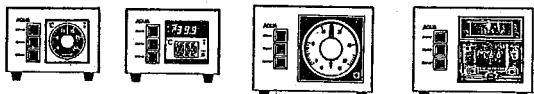
クーラー・ヒーターはチタン製。淡水はもちろん海水や薬品液にも使用できる高性能の循環式小型加熱冷却装置です。

形式	クーラー	ヒーター	概略水量	価格
HC061A-3	65W	300W	120 l	¥196,000
HC101A-3	100W	300W	160 l	¥207,000
HC131A-5	130W	500W	260 l	¥220,000
HC201A-5	200W	500W	360 l	¥237,000
HC301A-5	300W	500W	670 l	¥298,000
HC401A-5	400W	500W	1000 l	¥335,000



■ 温度コントローラー

温度を精度良く一定に保つことができます。循環ポンプなどの使用に便利な予備コンセント付き。警報付きなど各種あります。



形式	設定方式	温度指示	温度目盛	制御方式	価格
TA200※	アナログ	なし	-50 ~ 50℃	比例式	¥26,000
TA201-S	アナログ	全指示	0 ~ 50℃	比例式	¥38,000
TD202※	デジタル	偏差指示	0 ~ 99.9℃	比例式	¥29,000
TA300-S	アナログ	なし	0 ~ 50℃	三位置	¥37,000
TA301-S	アナログ	全指示	0 ~ 50℃	三位置	¥44,000
TD302-S	デジタル	偏差指示	0 ~ 99.9℃	三位置	¥48,000
TD303-S	デジタル	全指示	0 ~ 99.9℃	三位置	¥58,000

注) 測温抵抗体と併せてご使用下さい。

※印はサーミスター測温体 ¥1,800(空気用) ¥3,000(水用)

無印は白金測温体シース材質 SUS304 ¥7,900 Ti ¥12,000

■ 低温恒温循環水槽

実験台でも使用できるように極めてコンパクトにまとめた低温恒温循環水槽です。水温は低温から高温までを任意に設定することができます。外部循環機能をそなえておりますので恒温水槽のほか、カラムの冷却、保温など幅広い用途があります。

形式: CT 65-300-S

使用温度範囲: 0~50℃

温度調節精度: ±0.1℃

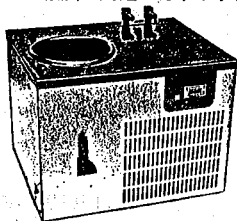
外形寸法: W420×D330×H340

槽内寸法: φ153×H187

冷凍機: 65W

ヒーター: 300W

価格: ¥250,000



■ 温度勾配装置 (ウォーターバス)

温度調節水槽はそれぞれ独自の温度に設定できます。

精度の高い恒温が得られます。温度の設定はデジタル式。

振とう装置付きもあります。

形式: TGV-3(三連)/TGV-6(六連)

使用温度範囲: 0~50℃

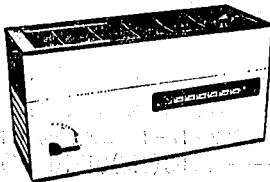
温度調節精度: ±0.05 ~ ±0.1℃

槽内寸法: 150×260×150×3/×6

冷凍機: 200W/300W

ヒーター: 90W×3/×6

価格: ¥620,000/¥780,000



■ 恒温コンテナ

蓄冷体の融解速度を微妙にコントロールして恒温を保つ小型の恒温輸送用コンテナです。凍結したら困るあらゆる物体の低温での恒温輸送に威力を発揮します。商用電源、大型バッテリーを使用しないので可動性に富みどこでも使えます。

形式: CTC 421

外形寸法: 407×193×H298

庫内寸法: 246×122×H200

コントロー: デジタル設定、デジタル表示

価格: ¥78,900 (蓄冷体-15℃付)



■ 恒温ボックス

四面全面加熱冷却の新方式による高性能の恒温ボックス。庫内は精度よく一定温度に保たれ霜が付かず乾燥しません。

形式: CTA 452-1

外形寸法: W700×D460×H440

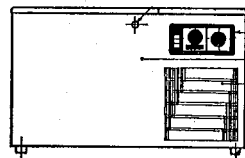
槽内寸法: φ380×H350

温度範囲: 10~40℃

冷凍機: 65W ヒーター: 100W

蛍光灯: 32W タイマー: 24h

価格: ¥350,000



■ ポータブル インキュベーター

小型軽量、持ち運びが容易です。庫内は精度よく一定温度に保たれます。冷凍機とヒーターを備えていますので庫内を低温(0℃)から高温(40℃)まで任意の温度に設定することができます。電源は交流・直流両用です。車載用として搬送、野外での使用の他研究室内で利用することができます。

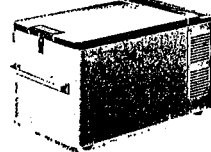
透明蓋付もあります。

形式: CTH 305

外形寸法: 631×360×H373

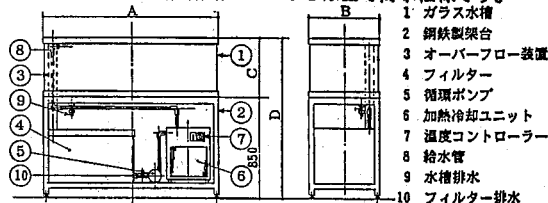
槽内寸法: 350×280×H260

価格: ¥187,000(12V用)



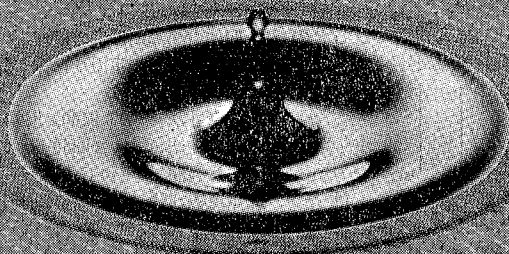
■ 水生生物環境調節装置

各種の魚介類が飼育できます。各機器はユニット形式を採用。点検管理が容易です。水槽、加熱冷却ユニット、温度コントローラー、フィルター、循環ポンプなどは全て海水仕様です。



形式	水槽	クーラー	ヒーター	価格
ARA 9.5-101A-5	900×500×450	100W	500W	¥459,000
ARA 9.6-131A-5	900×600×600	130W	500W	¥663,000
ARA12.5-131A-5	1,200×500×500	130W	500W	¥678,000
ARA12.6-201A-5	1,200×600×600	200W	500W	¥858,000
ARA15.6-301A-10	1,500×600×600	300W	1,000W	¥1,005,000
ARA15.7-401A-10	1,500×750×750	400W	1,000W	¥1,297,000
ARA18.6-301A-10	1,800×600×600	300W	1,000W	¥1,107,000
ARA18.7-401A-10	1,800×750×750	400W	1,000W	¥1,475,000

永年にわたりご信頼をいただいている
ニッスイの組織培養用培地を
ready-to-useでお届けします。



- ニッスイの組織培養用液体培地はすべてGMP適合工場の最新設備で製造されています。
- L-グルタミン、炭酸水素ナトリウムも含んだ液体培地なので開栓後すぐに使用できます。*
- バイロジェンフリーの超純水を用いて製造しています。
- 培地調製後短時間のうちに0.1 μ mのフィルターを使用し、ろ過滅菌しています。
- 容器にはNalge社製角型PETG**プラスチックボトルを使用しています。

* 目的に応じて適量の血清を加えて下さい。 ** 非結晶性PET樹脂



イーグルMEMリキッド
「ニッスイ」
(製品コード 06650)

RPMI 1640 リキッド「ニッスイ」(製品コード 06652)

SFM-101リキッド
「ニッスイ」
(製品コード 06654)



製造発売元

日水製薬株式会社

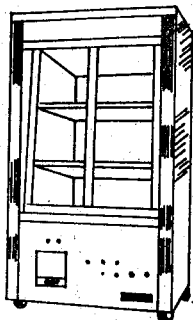
〒170 東京都豊島区巣鴨2-11-1 ☎03(918)8161

お問い合わせは——☎03(918)8171(直通)

▲上記以外の培地および各種粉末培地のバルク供給などについても、ご相談をお受けいたします。上記へお問い合わせ下さい。

NK式生物研究用機器

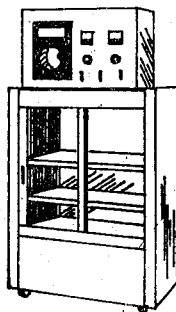
NK式電気低温恒温器(送風循環型) 高精度普及型



型式	LP-100	LP-150	LP-200
仕様	-S型	-S型	-S型
内法 間口×奥行 ×高さ%	460×380 ×490	560×380 ×670	660×410 ×670
温度 範囲	+5℃ ～45℃	+5℃ ～45℃	+5℃ ～45℃
価格	26万円	30.5万円	32万円

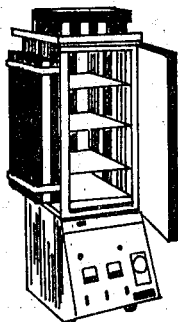
※その他のいろいろなタイプがあります。

NK式プログラム電気低温恒温器(送風循環型) 四季の温度がプログラムで自在に再現できます！



型式	LP-150	LP-200	LP-300
仕様	-3P	-3P	-3P
内法 間口×奥行 ×高さ%	460×880 ×480	560×380 ×670	660×410 ×670
温度 範囲	+5℃ ～45℃	+5℃ ～45℃	+5℃ ～45℃
価格	49.8万円	53.5万円	60万円

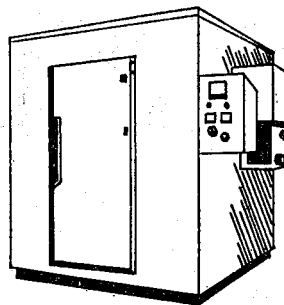
NK式人工気象器 植物の育成、小動物(昆虫)飼育の本格派！



型式	LH-100	LPH-100	LH-100
仕様	-RD型	-RD型	-RDP型
内法 間口×奥行 ×高さ%	360×350 ×680	360×350 ×680	360×350 ×680
温度 範囲	+5℃ ～45℃	+10℃ ～45℃	+5℃ ～45℃
価格	温度のみ 47万円	温・湿 度付 73万円	プログラ ム付 66万円

※その他のいろいろなタイプがあります。

NK式プレハブ電気低温恒温槽 組立、移設、増設が思いのまま！

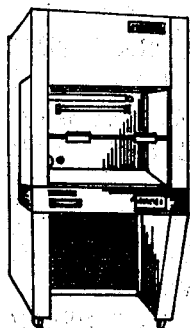


精密型

- LH型+5℃～45℃
価格1坪 1,190,000円
より各種
- LP型+18℃～45℃
価格1坪 1,290,000円
より各種

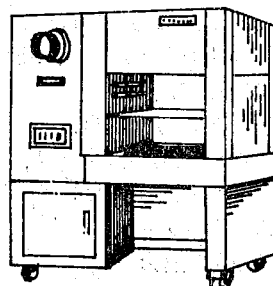
※詳細はプレハブシリーズカタログをご請求下さい。

NK式クリーンベンチ(垂直層流型)



NKB-VS-850
¥780,000
NKB-VS-1300
¥880,000

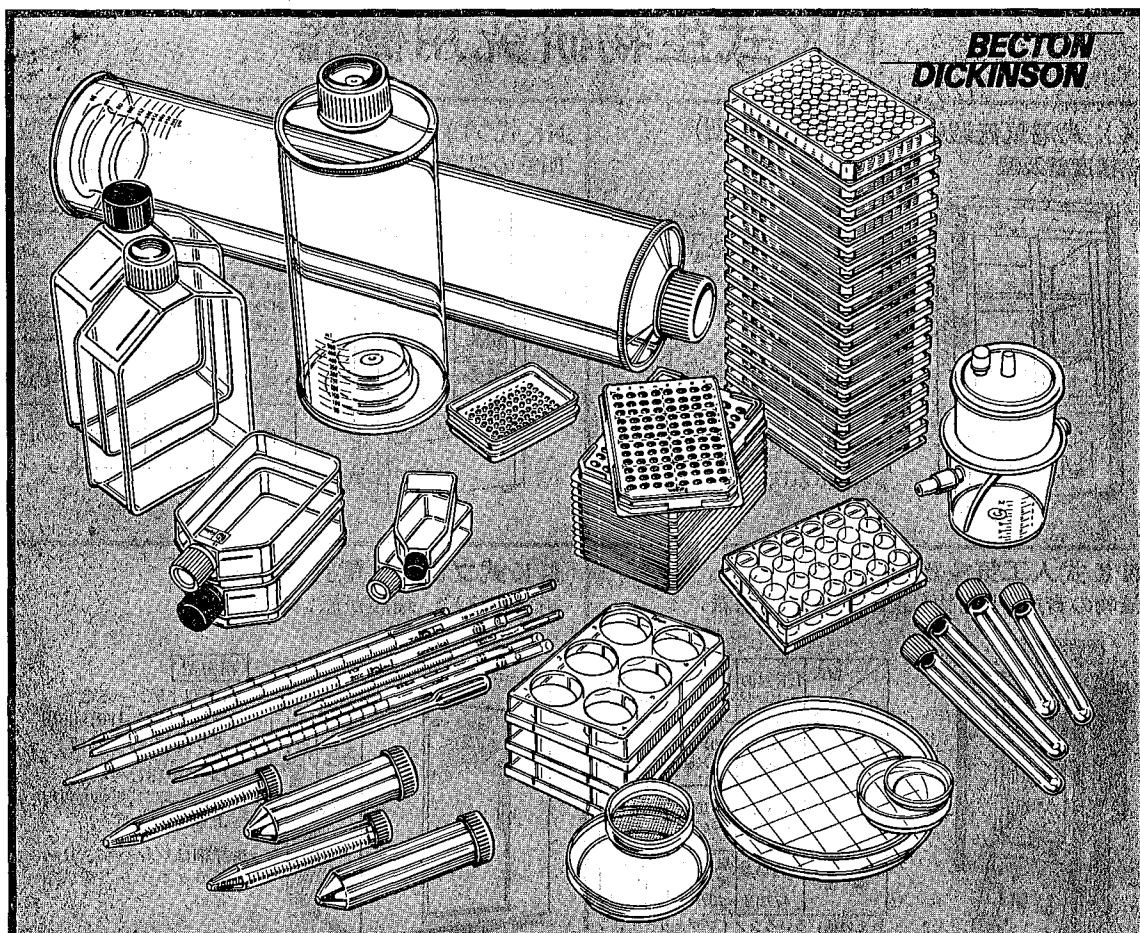
NK式クリーンベンチ(垂直層流両面型) 無菌作業の能率アップに！



NKB-VW-850
¥1,200,000
NKB-VW-1300
¥1,500,000

NKS 株式会社 日本医化器械製作所

本社 〒550 大阪市西区江戸堀1丁目19番24号 電話 大阪 06(443)0712代
東京営業所 〒183 東京都府中市緑町7053-4 電話 府中 0423(65)3245代
工場 〒583 羽曳野市駒ヶ谷5番地47号 電話 羽曳野0729(58)1919代



1957年、組織培養器具にプラスチックの時代が始まった。 ファルコン組織培養器具

1956年11月、米国 Emeryville の海軍微生物研究所では、人や動物の細胞をポリスチレン製ディッシュで培養することに興味を示しました。このことにいち早く着目したファルコンでは、プラスチック表面における細胞の付着や増殖について研究を進め、1957年ついに組織培養処理を施した高品質のプラスチック製ディッシュの開発に成功致しました。それは、ガラス製器具の使用にとも

なうさまざまな問題点を一挙に解決し、組織培養の分野に大きな前進をもたらしました。

そして今日まで、ファルコンの活動は、よりすぐれた組織培養器具を開発することに集中しました。

その成果として、最近ではより高度な表面処理を施したプライマリア組織培養器具をお届けすることもできました。

組織培養の進歩とともに、ファルコンは常に新しい可能性をもとめ続けます。



Falcon

輸入販売元

日本ベクトン・ディッキンソン株式会社
Nippon Becton Dickinson Co., Ltd.

〒107 東京都港区赤坂8-5-34 島蔭ビル TEL. 03(403)9991(代)

●B-D、ファルコン、Falcon、プライマリアはベクトン・ディッキンソン アンド カンパニーの商標です。●Becton Dickinson Labwareはベクトン・ディッキンソン アンド カンパニーの事業部です。

製造元



Becton Dickinson Labware

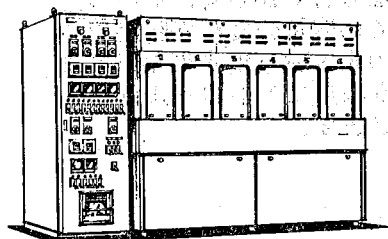
ベクトン・ディッキンソン ラブウェア事業部

Division of Becton Dickinson and Company

Aquarex

研究に應える設備です

研究者のニーズにどう対応できるか——できるかぎりの努力をする
べきだと考えています。多機種の中から一部製品をご案内いたします。



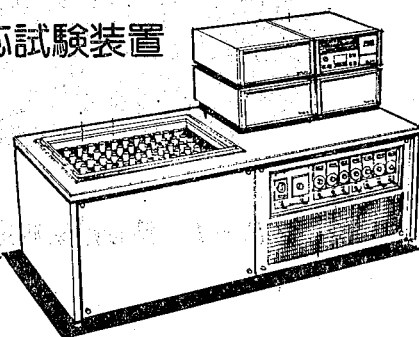
低温水棲生物生理実験装置

低温水棲生物の生理実験用装置。極寒冷地の植物性・動物性プランクトン、ウニ、ヒトデ、ベントス等に最適。水槽・温度調節装置・照明装置を装備。6槽分離独立。温度制御範囲は $-5^{\circ}\text{C} \sim +30^{\circ}\text{C}$ 。照明装置（クールレイランプ、熱線吸収ガラス使用。高照度30,000 Lux。照度・照明時間の自由設定可能。

TG6-1500

卵稚仔温度反応試験装置

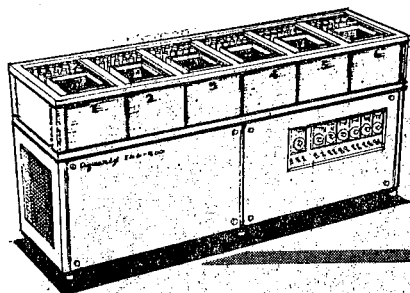
水生生物の卵・稚仔の環境温度に対する反応研究用に最適の装置。試験管88本により環境温度勾配を広範囲に一定保持。実験対象の各部位置温度を時間経過に従って記録。照度も自由に選べる照明装置。小型多点温度記録装置が特長です。



TG11-8

卵稚仔温度反応試験装置用馴致装置

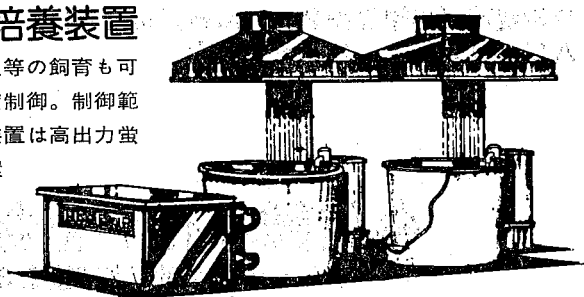
卵稚仔温度反応試験装置（TG11-8）の馴致用装置。本装置は6槽に分離独立。水槽ごとに温度設定が可能。各槽ごとの試験管挿入可能。卵稚仔を反応装置（TG11-8）に入れる前準備に、また分類作業に最適。温度制御は正確・広範囲に温度設定が可能。



TG6-300

プランクトン培養装置

動植物性プランクトンの海水培養用装置。幼魚・稚魚等の飼育も可能。2ポリエチレン円形2重水槽。外側槽による温度制御。制御範囲 $5 \sim 35^{\circ}\text{C}$ 。ヒーター・クーラー自動切換式。照明装置は高出力蛍光灯。光量調節・照明時間の自由変更可能。海水循環酸素補給・水質維持装置付。



AR11D-1500

株式会社 **アクアレックス**

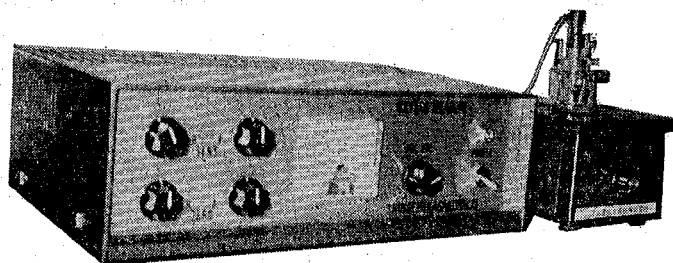
〒143 東京都大田区中央2丁目2番6号

お問合せ
ご相談はお気軽に ☎ 東京 03(778)0202

酸素電極による呼吸測定装置

(溶存酸素による呼吸測定装置)

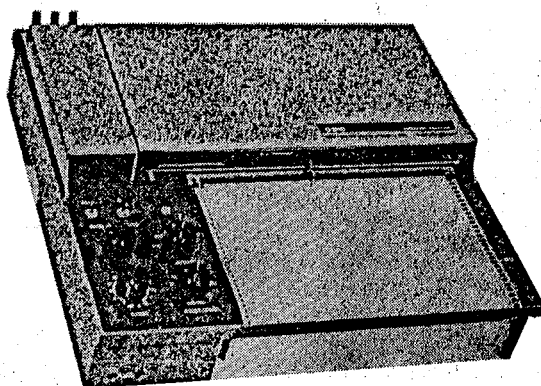
ミトコンダリア及び細胞懸濁液の溶存酸素減少による呼吸率の測定は、古くから行なわれて来ました。懸濁液を入れる密封容器の取扱いはかなりむずかしく、その容器の変更も困難でしたが、この容器は1.5ml~5mlまでの容量の変更が容易であり、試薬を懸濁液に投入したり、懸濁液の一部を密封状態のまま取り出す事が出来ます。セルはウォータージャケットがついていますので精密な温度コントロールが出来ます。フルスケール10mVの記録計に接続しても御使用できます。



S-I 溶存酸素測定装置

記録計

1mV~10V
フルスケール全幅移動可能
400K Ω ~無限大 (レンジによる)
250mm幅
6段変速 (標準最少2.5mm/min)
AC100V 50~60Hz



 信誠理化学器械株式会社

〒112 東京都文京区後楽2-21-14

TEL (03) 815-3066代

FAX (03) 815-3231

あらゆる研究分野に対応できる多様なシステム。
 観察から撮影まで、可能な限り自動化を実現。



全自動写真撮影装置を内蔵。今までにない多様なシステム性と操作性で画像解析、分光測光などの将来的研究ニーズにも充分対応。電動6ヶ穴レボルバー、1×~100×まで完全ケラー照明、写真撮影レンズ4種類内蔵、フィルム面と同じ像を観察できる一眼レフ式ファインダー、視野数26.5φの超広視野など随所に最先端のメカニズムが生きています。しかも、35mm2台+大版1台+TVカメラ1台計4台を同時装着できる3-WAYカメラ。鮮明な像を観察、確実に記録できます。

VANOX-S series

最高級写真顕微鏡オートタイプ

●電動6ヶ穴レボルバー ●対物レンズに連動した照明系の切換えは調光・開口絞り・視野絞りを自動完了 ●低倍率のピント合わせ ●カメラ選択 ●撮影レンズの切換えなどを自動化(マニュアル操作も可)

VANOX-T series

最高級写真顕微鏡スタンダードタイプ

●電動6ヶ穴レボルバー ●NDフィルター11段階切換えによる自由調光 ●ボタンによるカメラ選択 ●撮影レンズ4種内蔵(ターレット切換え)

未知をひらく光学技術

〈仕様〉●超広視野接眼(視野数26.5φ) ●鏡筒長定常装置付 ●6ヶ穴電動レボルバー ●右下共軸ハンドル大型ステージ ●各種フィルター内蔵 ●撮影レンズ4種類内蔵 ●全自動写真撮影装置内蔵 ●35mmハーフサイズ撮影、スケール写し込み可(オプション)

VANOX-S/VANOX-T

最高級写真顕微鏡システム

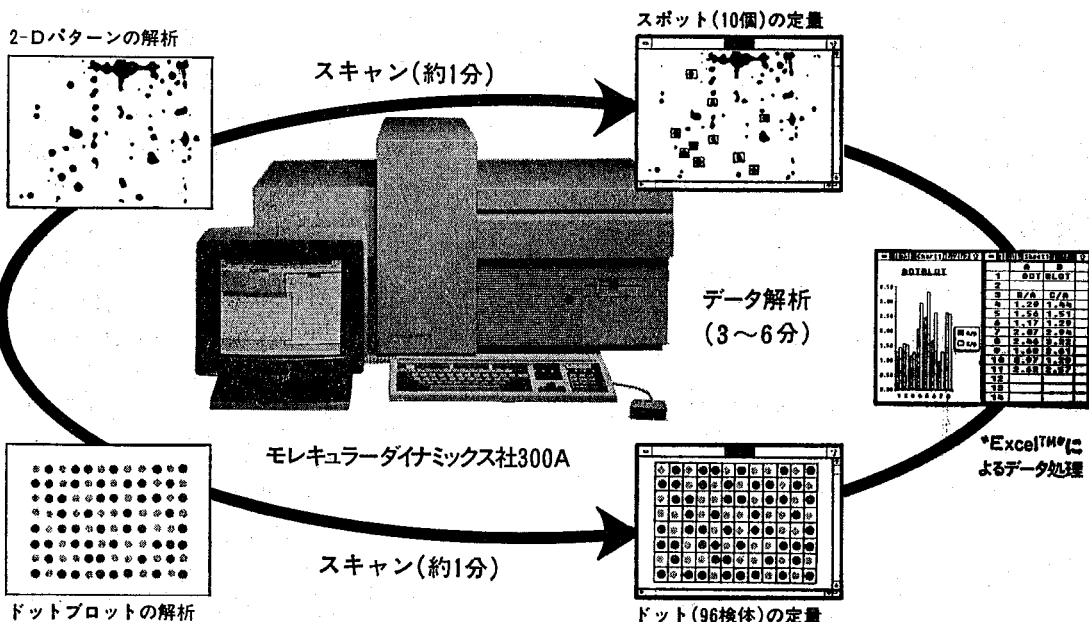
オリンパス光学工業株式会社
 オリンパス販売株式会社
 総合代理店

(株)三光オリンパス

イメージアナリシスの世界が拡がりました。

MOLECULAR DYNAMICS 300A SCANNING IMAGER

300A SCANNING IMAGERは、集光シリンダーによる革新的な高速スキャニングと卓越した解析ソフトにより、既存のデンシトメーターで解析していた電気泳動パターンはもちろん、従来では困難であったり、長時間必要であった電気泳動ゲル・メンブレンフィルター（ドットプロット、ウェスタンプロット）・オートラジオグラム等の解析を正確に素早く行います。たとえば、ドットプロットメンブレン及び2-Dパターンの解析（スポット10個の定量）は5～7分で終了します。



MOLECULAR DYNAMICS AUTOPHORESIS 1000A



モレキュラーダイナミクス社1000Aは、電気泳動中の試料の分離状態を観察できるHigh Resolution Dynamic Imaging技術を実用化した初めての製品です。結果は瞬時にフィルムに記録できるため、1000Aではゲルの染色の必要がなく、もちろん放射性標識、蛍光標識も不要です。



日本総発売元

株式会社・トミー商事

〒175 東京都板橋区成増1-31-8 ソレイユ成増201
TEL.03(976)8421 FAX.03(976)8502

Mupid-2.

ミニゲル電気泳動システム《ミューピッド-2》

ミューピッド-2は、泳動槽・パワーサプライ・ゲルメーカーセットを組み合わせたコンパクトな電気泳動システムです。核酸・タンパク質など様々な泳動が可能です。

- お一人に一台以上。
- 安全、軽量、簡単な操作。
- 学生の実習用など教材としても最適。

※部品の別売もしております。

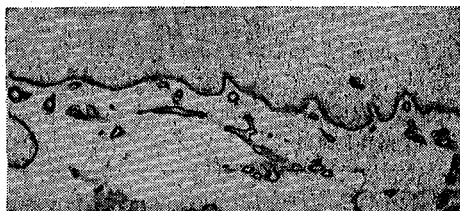


超安価 **¥29,800**

(PAGE調製用カバー、電源及びゲルメーカーセットを含む)

Didets. (抗血清シリーズ)

- 全血清(留分)の凍結品、高力価。
- 細胞骨格タンパク質、ホルモン、酵素等に豊富な商品群。



染色例: Type IV Collagen (Bovine Skin)

※Didetsは、(株)アドバンスが製造した免疫研究用試薬に対する登録商標です。

〔シリーズ品〕	〔抗原〕	は新製品
細胞骨格タンパク質	(ウシ)タイプI~IVコラーゲン、(ヒト)タイプIV~Vコラーゲン、(ラット)タイプIコラーゲン、ラミニン、フィブロネクチン、アクチン、ミオシン、チューブリン	
ホルモン	LH-β、HCG、プロラクチン、ACTH、α-MSH、β-MSH、α-エンドルフィン、β-エンドルフィン、メチオニン・エンケファリン、ソマトスタチン、サブスタンスP、ニューロテニン、VIP、カルシトニン、ガストリンI、S-100タンパク	
酵素	カーボニック・アンヒドラーゼ、グルタマイト・デカルボキシラーゼ、グルタマイト・デヒドロゲナーゼ、フタル・コリンエステラーゼ、アルカリ・フォスファターゼ、Na ⁺ ・K ⁺ -ATPase	

(免疫動物はすべてウサギです。)

※製品についての詳細は下記までお問い合わせ下さい。

製造元 **株式会社アドバンス** 〒103 東京都中央区日本橋小舟町5-7 ☎03(667)1551(代)

総販売元 **コスモ・バイオ株式会社** 〒103 東京都中央区本町4-13-5 第20中央ビル ☎03(663)0723

マウスのテラトーマ

森脇和郎／序 野口武彦 村松 喬／編集

— EC細胞による哺乳動物の実験発生学 —

A5判・296頁
定価 3914 円
(本体 3800 円)

テラトーマの生物学的な知識、EC細胞の種類と成立、EC細胞を用いた初期胚の細胞生物学・分子生物学的研究、EC細胞のキメラ動物への応用などについて、研究の進展を紹介し、その理論と実験技術を解説。医学・生物学・薬学など発生学、遺伝学に関心を持つ方がたの絶好の参考書です。

哺乳動物の初期発生

妹尾左知丸 加藤淑裕 入谷 明
鈴木秋悦 館 郷／編集

— 基礎理論と実験法 —

B5判・480頁
定価 15450 円
(本体 15000 円)

初期発生の基礎理論をはじめに説明し、ついで初期胚を研究対象とする主要な実験研究法を解説してあります。生命現象研究へ大きな手がかりとなる本書は、医学・生物学・農学・薬学を専攻する研究者の必携の書です。

体細胞遺伝学

山根 續 岡田善雄 堀川正克 黒木登志夫／編集

A5判・720頁
定価 10094 円
(本体 9800 円)

HVJによる細胞融合法、薬物や放射線、化学物質を用いた細胞の突然変異による研究、あるいは遺伝子組換え法を使った研究等体細胞遺伝学研究の最前線をまとめたモノグラフィー。医学・生物学・農学・薬学研究に絶好の参考書です。

理工学社

〒113東京都文京区本駒込5-9-10 振替東京1-34676 電話03(828)5211(代) <図書目録進呈>

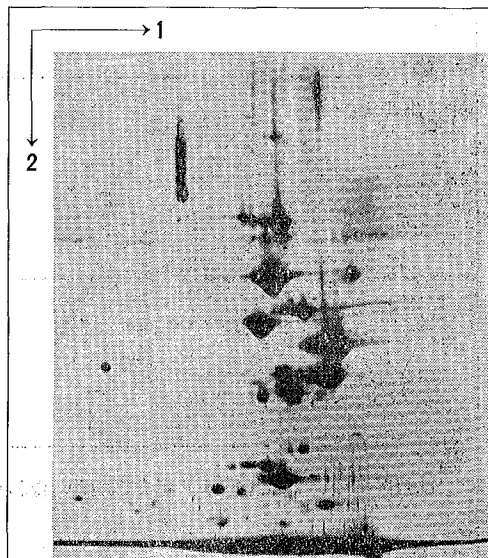
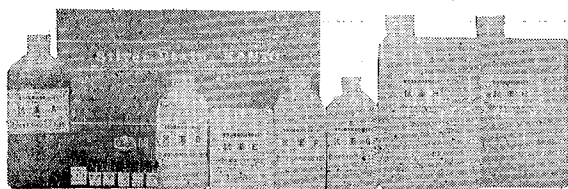
Silver Stain KANTO

電気泳動用銀染色キット

シルバーステインKANTOは、蛋白・核酸を高感度で簡単に検出できます。

シルバーステインKANTOは、現像が緩やかにすすむように調製されています。現像停止のポイントを判断しやすく美しい染色像が得られます。

Cat.No.57650 **Silver Stain KANTO**
電気泳動用銀染色キット・シルバーステインKANTO
スラブゲル (140mm×140mm×1.0mm) 25枚分



O'Farrell 2D-electrophoresis (一次元目はNEPHGE(1)、二次元目は、SDS/PAGE(2))。試料は、筋蛋白 5 μ g。

関東化学株式会社 試薬事業本部

103 東京都中央区日本橋本町3-2-8 03(663)7631
541 大阪市東区瓦町3丁目1番地 06(222)2796

Ready for Use の新ブロッキング剤

ブロック エース Block Ace

Non-specific Binding を強力にブロック/そして安価/

用
途

- ELISA等のブロッキング
- 試料および標識第2抗体の希釈
- B/F分離等の洗浄
- 生理活性物質の安定化剤

特
長

1. ELISA等でバックグラウンドを低く抑えます。
2. BSA溶液をブロッキング剤として用いた場合より測定感度が上がり、かつ安価です。
3. 液状なので直ちに使用できます。
4. 加熱滅菌処理済です。

発売元



大日本製薬株式会社

ラボラトリー プロダクツ部

〒564 大阪府吹田市江の木町33-94

TEL 大阪(06)386-2163 (代表)

製造元



雪印乳業株式会社

〒065 札幌市東区苗穂町6-1-1

CORNING

組織培養用プラスチック製品

ご満足いただけないCORNING組織培養用プラスチック製品は、無償でお取替えることをお約束します。

PYREXのコーニングが提供する組織培養用プラスチック製品は
実験のバラツキを解消します。

●無菌生産

コーニングの組織培養用製品は、無菌環境で作られています。このためバクテリアは勿論、機械油の蒸気やほこり等の付着もなく、培養特性が安定しています。

●フォームラック

コーニングの遺沈管・培養管には、フォームラック付きがあります。収納や運搬に便利なおえ、ガタツキがないため傷をつけることがなく、沈澱物が再浮遊する心配もありません。

●100%リークテスト

コーニングのプラスチックは、全数圧力試験を行っております。また厚手に成形されているので、リークやクラックの心配はありません。

●ダブルシールキャップ

ダブルシールキャップは、容器の口部内側と端部の2箇所までシールするもので、漏洩を完全に防ぎます。

●クロスコンタミネーション防止

マイクロプレートは、孔が独立しており、クロスコンタミネーションの危険がありません。

CODE	品名	品種	個/パック	個/ケース	材質(本体)	表面処理	滅菌	備考
25000	ベトリ皿	35φ×10mm	20	500	スチロール樹脂	○	無菌生産	
25010		60φ×15mm	20	500	"	○	"	
25020		100φ×20mm	20	500	"	○	"	
25100	フラスコ	25cm ³ (70mℓ)	20	300	スチロール樹脂	○	無菌生産	カントネック、ダブルシールキャップ
25110		75cm ³ (270mℓ)	5	100	"	○	"	"
25120		150cm ³ (600mℓ)	5	40	"	○	"	"
25140	ローラーボトル	850cm ³ (2350mℓ)	2	36	スチロール樹脂	○	γ線	ダブルシールキャップ
25200	培養管	16φ×125ラック付	50	500	スチロール樹脂	○	無菌生産	ダブルシールキャップ
25310	遺沈管	15mℓラック付き	50	500	スチロール樹脂	—	γ線	許容過心力1800 G、ダブルシールキャップ
25330		50mℓラック付き	25	300	ポリプロピレン	—	ETO	" 5000 G "
25820	マイクロプレート	24孔、平底、蓋付き	1	50	スチロール樹脂	○	γ線	
25860		96孔、平底、蓋付き	1	50	"	○	"	

●表面処理は、親水性と細胞親和性を与えるもので、コーティングではありません。
●ETOは、エチレンオキシドガス滅菌です。
●詳細はカタログをご請求ください。

岩城硝子株式会社

本社/〒100 東京都千代田区丸の内3-2-3 (富士ビル)

本社販売部 ☎ 03(214)7401(代)

大阪支店 ☎ 06(362)6291(代)

名古屋支店 ☎ 052(211)3855(代)

九州支店 ☎ 092(451)5606(代)

広島支店 ☎ 082(248)0293(代)

札幌営業所 ☎ 011(221)3477(代)